岐阜県教育文化財団文化財保護センター
調査報告書　第93集

七反田番場山
7・10・11号古墳

2005

財団法人　岐阜県教育文化財団

序

清らかな長良川が市域を西流し、斉藤道三・織田信長の居城として華やかな一舞台を飾った岐阜城が市街地を見下ろす岐阜市は、豊かな景観に恵まれ、堂々たる歴史を物語る町です。そして、今なお情緒ある町並みがいたるところに残っており、人々の暮らしの中にも風情と人情が感じられます。

このたび、岐阜県基盤整備部による主要地方道岐阜美濃線番場山トンネル工事に伴い、工事予定地内の埋蔵文化財の記録保存をはかるため、岐阜市加野に所在する七反田番場山７・10・11号古墳の発掘調査を実施しました。

今回の調査では、主体部が横穴式石室である古墳２基と木棺直葬である古墳１基を検出し、須恵器・土師器・鉄製品などの当時の様相の分かる遺物が出土しました。特に、県内では古墳時代中期末から後期の木棺直葬の主体部をもつ古墳の調査事例は少なく、貴重な資料となりました。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土品の整理・報告書作成にあたりまして、多大な御支援・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、岐阜市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成17年３月

財団法人　岐阜県教育文化財団
理事長　日比　治男

例言

1　本書は、岐阜県岐阜市加野山本地内に所在する七反田番場山７号古墳・七反田番場山10号古墳・七反田番場山11号古墳（岐阜県遺跡番号　21201－10126、10129、10130）の発掘調査報告書である。

2　本調査は主要地方道岐阜美濃線番場山トンネル工事に伴うもので、岐阜県基盤整備部道路建設課から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターが実施した。

3　発掘調査は、伊藤秋男南山大学教授の指導のもとに、平成15年度に実施した。整理作業は平成16年度に実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当などは、本書第１章第２節に一括掲載した。

5　本書の執筆分担は目次に示した。編集は三浦・小野木が行った。

6　発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削、地形測量・空中写真測量などの業務は朝日航洋株式会社に委託して行った。

7　遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。

8　自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託して行った。その結果は第４章に掲載した。

9　発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・五十音順）

　内堀信雄、恩田裕之、島田崇正、横田宏、横幕大祐、渡邉博人

10　本文中の方位は、世界測地系第Ⅶ系の座標北を示している。

11　土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄1998『新版　標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

12　調査記録及び出土遺物は財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターで保管している。

目　次

序
例言

第１章　調査の経緯……（三浦）……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の経過と方法……2

第２章　遺跡の位置と環境……5
　第１節　地理的環境……（藤岡）……5
　第２節　歴史的環境……（小野木）……6

第３章　調査の結果……（三浦・小野木）……9
　第１節　基本層序……9
　第２節　遺構と遺物の概要……9
　第３節　７号古墳……11
　第４節　10号古墳……23
　第５節　11号古墳……27

第４章　自然科学分析……34

第５章　まとめ……39
　第１節　調整区内の動向……（小野木）……39
　第２節　古墳の時期と形態……（小野木）……40
　第３節　古墳の石室石材……（藤岡）……41
　第４節　須恵器の産地比較……（小野木）……44

参考文献
写真図版
報告書抄録

挿図目次

図１　調査地位置図…… 1
図２　グリッド設定及び地形測量図…… 4
図３　周辺遺跡位置図…… 7
図４　基本層序…… 9
図５　調査区全体図…… 10
図６　７号古墳墳丘断面図…… 12
図７　７号古墳石室実測図（１）……14
図８　７号古墳石室実測図（２）……15
図９　７号古墳側壁石・天井石の崩落状況…… 16
図10　７号古墳周溝断面図…… 17
図11　７号古墳前庭部外護列石の状況…… 18
図12　７号古墳出土遺物実測図…… 20
図13　７号古墳石室内遺物出土状況…… 22
図14　10号古墳石室内石組み出土状況…… 24
図15　10号古墳墳丘断面図…… 25
図16　10号古墳石室実測図…… 26
図17　11号古墳墳丘断面図…… 28
図18　11号古墳墓坑検出状況…… 28
図19　11号古墳墓坑完掘状況…… 29
図20　11号古墳出土遺物実測図（１）……31
図21　11号古墳出土遺物実測図（２）……32
図22　11号古墳周溝・墓坑、７号古墳周溝遺物出土状況…… 33
図23　土師器胎土中の粒子顕微鏡写真…… 37
図24　赤色顔料塊とポイント分析結果…… 38
図25　７・10号古墳の石材一覧…… 42
図26　石室使用の石材…… 43

表目次

表１　周辺遺跡一覧表…… 6
表２　７号古墳出土遺物観察表…… 21
表３　11号古墳出土遺物観察表（１）……31
表４　11号古墳出土遺物観察表（２）……32
表５　土師器胎土の粘土及び砂粒の特徴…… 35
表６　粘土塊の化学組成…… 36
表７　調査区内の動向…… 39
表８　古墳の諸要素…… 40
表９　７・10号古墳の石材一覧…… 42
表10　須恵器の時期と産地の比較…… 44

写真図版目次

図版１　調査区遠景
図版２　調査区遠景・近景
図版３　７号古墳（１）
図版４　７号古墳（２）
図版５　７号古墳（３）
図版６　７号古墳（４）
図版７　７号古墳（５）
図版８　10号古墳
図版９　11号古墳　他
図版10　７号古墳出土遺物
図版11　11号古墳出土遺物

第１章　　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

岐阜県基盤整備部道路建設課では、交通混雑の緩和や冬季における円滑な交通の確保のために主要地方道岐阜美濃線の道路改良工事を計画した。

この建設工事に先立ち、岐阜市加野山本の番場山トンネル工事区域内に周知の古墳である七反田番場山７号古墳が存在することが判明した。これを受けて岐阜県教育委員会及び財団法人岐阜県文化財保護センターが、平成14年12月10・12日に15㎡の試掘確認調査を実施し、７号古墳の石室と周溝を検出した他、新たに２基の古墳の存在を確認した。

この試掘確認調査の結果を踏まえて、同月20日に岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会が開催された。その結果、地形などの状況から調査範囲の上部にあたる急斜面は古墳の存在する可能性がなく、緩斜面部分の800㎡の本発掘調査が必要であると判断された。そして、岐阜県基盤整備部道路建設課から岐阜県教育委員会が委託をうけ、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターが本発掘調査を行うこととなった。

新規発見の古墳は、七反田番場山10･11号古墳と命名され、岐阜県遺跡番号21201－10129、21201－10130として登録された。

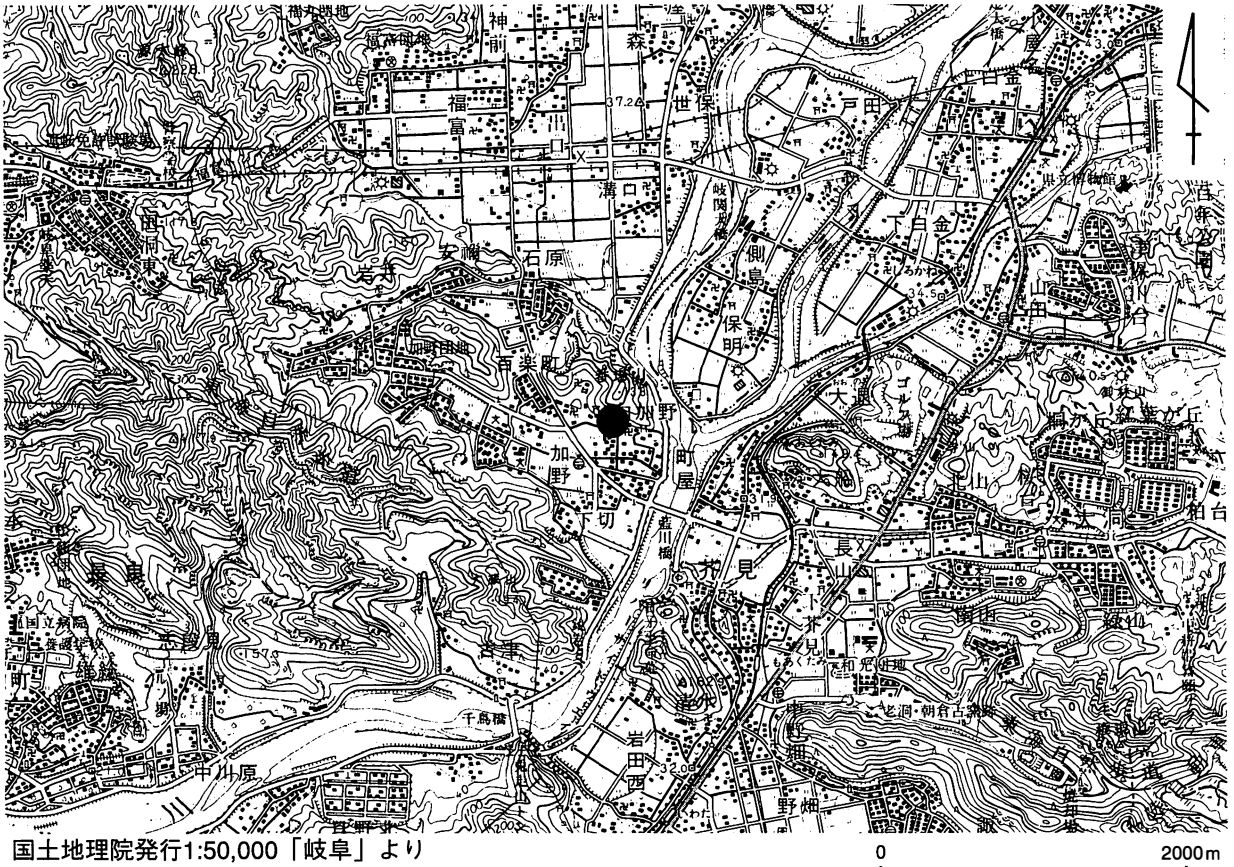


図１　調査地位置図

第２節　調査の経過と方法

１　調査期間

平成15年５月12日～８月18日

２　グリッド設定方法

発掘調査に先立ち、斜面の地形の様子を踏まえて、予想される古墳の主軸方向を基準にして調査区域内に４ｍ×４ｍのグリッドを設定した。グリッドの名称は北から南（斜面上方～下方）に向かって１～８行、西～東に向かってＡ～Ｋ列とし、その呼称は北西角の杭番号を用いた。

３　調査対象面積

800㎡

４　調査の経過

発掘調査の経過は以下のとおりである。

４月21日　地形測量、グリッド杭の設置。
　　28日　重機による表土掘削を開始。
５月７日　現場事務所の設置。現場への機材等搬入。
　　12日　作業員による人力掘削を開始。７・10号古墳にトレンチを設定し掘削を開始。
　　22日　トレンチにより古墳の様相を確認し、７・10号古墳の表土除去・石室内堆積土、７号古墳の周溝の掘削を開始。
　　27日　10号古墳石室の掘削を終了し、実測を開始。
　　28日　10号古墳の周溝を確認するためトレンチ掘削を開始。
６月３日　７号古墳に崩落した天井石を撤去。
　　４日　７号古墳羨道部の掘削を開始。
　　20日　７号古墳石室の掘削を終了、実測開始。
　　21日　11号古墳にトレンチを設定し掘削を開始。
　　25日　指導調査員（南山大学教授伊藤秋男氏）現地指導。
７月２日　10号古墳周溝を確認するためトレンチ掘削を開始。
　　10日　11号古墳の周溝の掘削を開始。
　　17日　７号古墳の前庭部の掘削を開始。
　　25日　７号古墳の断ち割りを開始。
　　29日　10号古墳の前庭部の掘削を開始。
　　31日　ラジコンヘリコプターによる空中写真測量実施。
８月２日　現地説明会。
　　４日　10号古墳の断ち割りを開始。11号古墳の主体部の掘削を開始。
　　11日　作業員による掘削を終了。
　　17日　すべての実測を完了。
　　18日　現場撤収。

5　調査方法

（１）石室

石室が露出した状態の７号古墳（周知の古墳）と、試掘確認調査で検出した調査区東側に位置する10号古墳、調査区の西側に位置する11号古墳の計３基を想定した調査を行った。具体的には、それぞれの古墳において地形から推定した石室の主軸を基準に小トレンチを入れて、石室内の堆積状況を確認すると共に、周溝の位置を把握した。調査は７・10号古墳を先行し、その調査の目処がついてから11号古墳の掘削を行った。

石室内部の掘削は小トレンチを入れながら、また必要に応じて礫や遺物の出土状況図などの記録を作成しながら進めていったが、石室石材の崩壊状況が予想よりも激しく、その除去にはかなりの労力を要した。出土遺物のうち床面直上に位置するものは、その出土状況を記録した。また、石室内部の堆積土については、そのすべてを水洗選別し遺物の発見に努めた。

（２）周溝

小トレンチを古墳の北側、東側、西側と、必要に応じてその中間に入れ、土層の確認をしながら周溝を検出していった。遺構埋土と遺構検出面の土色・土質が類似しているため、その差を認識することに苦慮したが、７・11号古墳は周溝を検出することができ、遺物も出土した。なお、遺構掘削を進めていくうえで土色・土質の判別が難しい場合は、小トレンチを入れて判断した。

6　遺跡・遺物の公開・広報

平成15年７月24日に記者発表を行い、８月２日に現地説明会を行い140名の参加をみた。また、平成16年11月16日～12月19日に岐阜県博物館にて開催した「発掘速報展　～いにしえの美濃と飛騨～」において主要な遺物の展示と解説を行った。

7　遺物・調査記録の整理作業

平成15～16年度に出土遺物・調査記録の整理作業を行った。作業の流れは次の通りである。

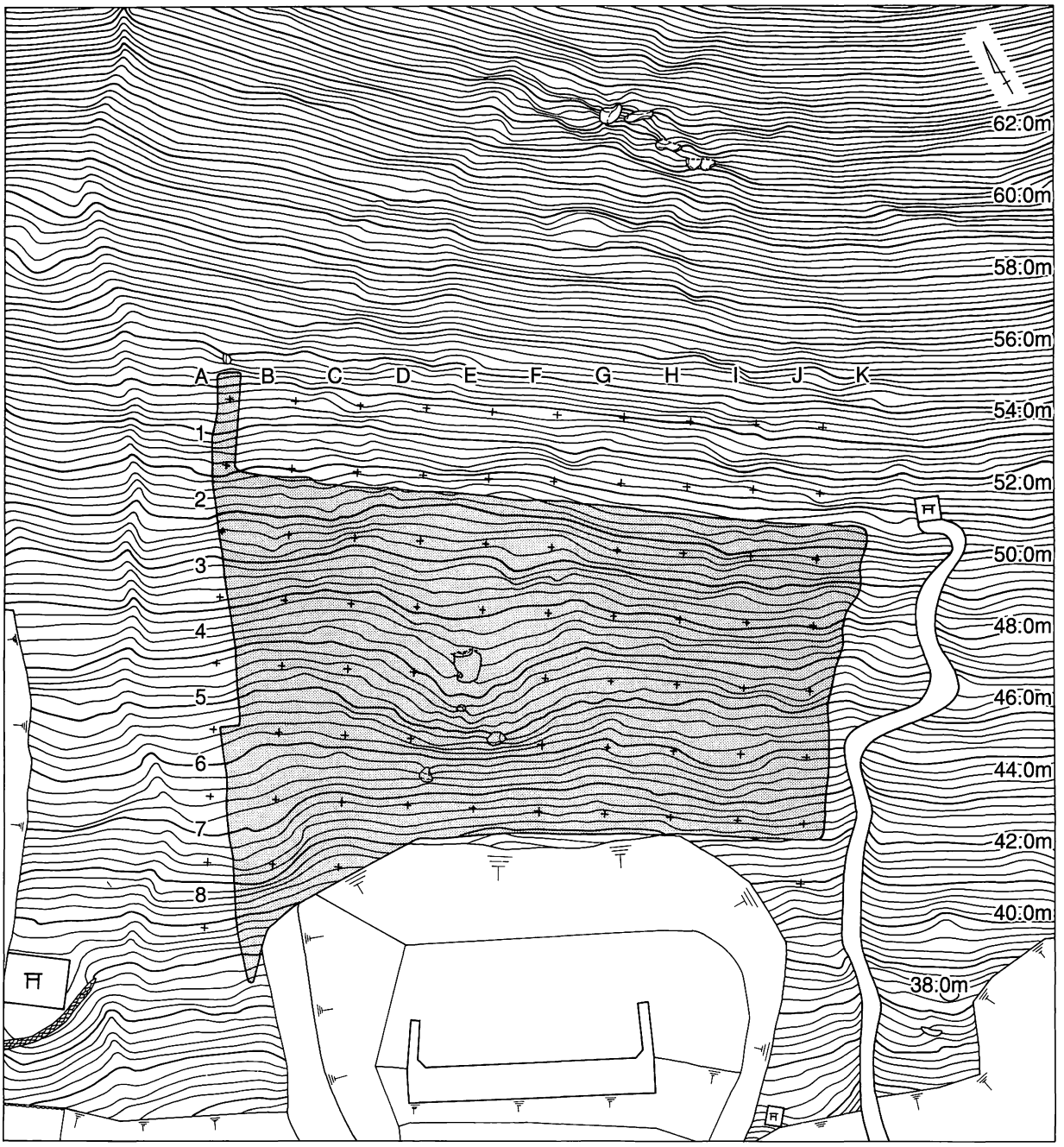
遺物の洗浄→遺物の注記→土器の接合・補強・補修→遺物の実測・観察表の作成→
遺構・遺物実測図の製図→遺物の写真撮影→図版作成→遺物・調査記録の収納・保管

なお、本報告書の執筆・編集は、上記の作業と並行して行った。

8　発掘調査及び整理作業の体制

	平成15年度	平成16年度
理事長	日比　治男	日比　治男
副理事長	高橋　宏之	高橋　宏之
副理事長	平光　明彦	平光　明彦
常務理事兼センター所長	福田　安昭	福田　安昭
経営課長	川瀬　崇敏	川瀬　崇敏
調査部長	武藤　貞昭	川部　　誠
担当調査課長	藤岡比呂志	藤岡比呂志
担当調査員	三浦　徹大	小野木　学

整理作業従事者　　岩田のり子、小木曽美智、酒衛成功、菅原祐子、竹部泉、野尻みどり
山口久子、渡邊泉



スクリーントーンは調査区の範囲を示す

0　10m

図２　グリッド設定及び地形測量図　（S=1/400）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

七反田番場山古墳群は岐阜市の北東部にあり、地形的には独立丘陵として存在する番場山（標高137.8m）の南斜面上に位置する。周辺を見ると西北西－東南東方向に山地が並び、番場山の東においてそれらの山地を切って長良川が北から南へ流れている。番場山の北側には武儀川と長良川によってつくられた平地があり、南側にも狭いながら平地がある。

番場山周辺（岐阜市長良北部～芥見）は、標高420m以下の山地と谷部に存在する平地からなる。山地は、前述したように西北西－東南東方向に連なっており、番場山もそれら一連の山地の一つである。番場山の西北西及び東南東には150～200mの頂をもつやや低い山地が並ぶ。それに比べて、番場山より1.5～２kmほど南には300～420mの頂をもつ山地の並びが存在する。

番場山周辺の山地は美濃帯堆積岩類からなり、この山地の地形に関しては次の２つの地質現象が大きく作用している。

・番場山より南へ３kmほどのところに、坂祝向斜と呼ばれる褶曲の軸が西北西－東南東方向に存在する。

・周辺の美濃帯堆積岩類は、砂岩主体の地層とチャート主体の地層の繰り返しからなっている。

この周辺の山地の方向は、坂祝向斜によって規制されている。その軸の方向（西北西－東南東方向）に同じ地質で同程度の高さの山地が分布することになる。また、山地をつくるチャートと砂岩は、物性がかなり異なる。チャートは侵食風化に強いため急崖をなす山体を形成し、砂岩層は侵食・風化に弱いため比較的なだらかな山体を形成する。そのような特徴をもっているため、西北西－東南東方向に急崖をなす山体と比較的なだらかな山体が交互に配列することになる。つまり、この周辺の山地は坂祝向斜がつくる地質構造の大枠に、チャートと砂岩という岩相の違いによる差別侵食が付け加わった地形がよく発達している場所である。

周辺部には広い範囲にわたって古墳が分布するが、地形・地質から古墳の分布を見ると、次の４つの箇所に分けられる。

・チャート層からなるがやや低い山地

・チャート層からなり高度が高い山地のふもと（南斜面）

・砂岩層からなる緩やかな傾斜地

・平地

この中で、七反田番場山古墳群は、チャート層からなるがやや低い山地の南斜面上にあると位置づけられる。

第２節　歴史的環境

七反田番場山古墳群は第１～４古墳群に分かれ、７・10・11号墳は第１古墳群内に位置する。以下、七反田番場山古墳群について、『岐阜市史通史編』に従い記載する。なお、古墳群の名称は『岐阜市史通史編』では第１～４支群、『岐阜市遺跡詳細分布調査報告書』では第１～４古墳群と呼称されており、本書では後者に従う。なお、以下のカッコ内の番号は、表１と図３の番号に対応する。

第１古墳群（１）は丘陵の南端で、西へ突出した小支丘の南西山麓にあり、11基から成る。外形はいずれも円墳で、直径10～12mである。内部主体は横穴式石室で、４号古墳は川原石を使用している。遺物は１号古墳から須恵器（坏、平瓶）、３号古墳から土師器（壺）が出土している。

第２古墳群（２）は第１古墳群の北に位置し、やや東に入り込んだ小支谷の北西山麓に６基存在したが、昭和44年の団地造成工事で滅失した。外形はいずれも直径10～12mの円墳であるが、３号古墳は14mである。内部主体は横穴式石室である。遺物は１号古墳から直刀、須恵器（坏・高坏・瓹）、３号古墳から直刀、鉄鏃、須恵器が出土している。

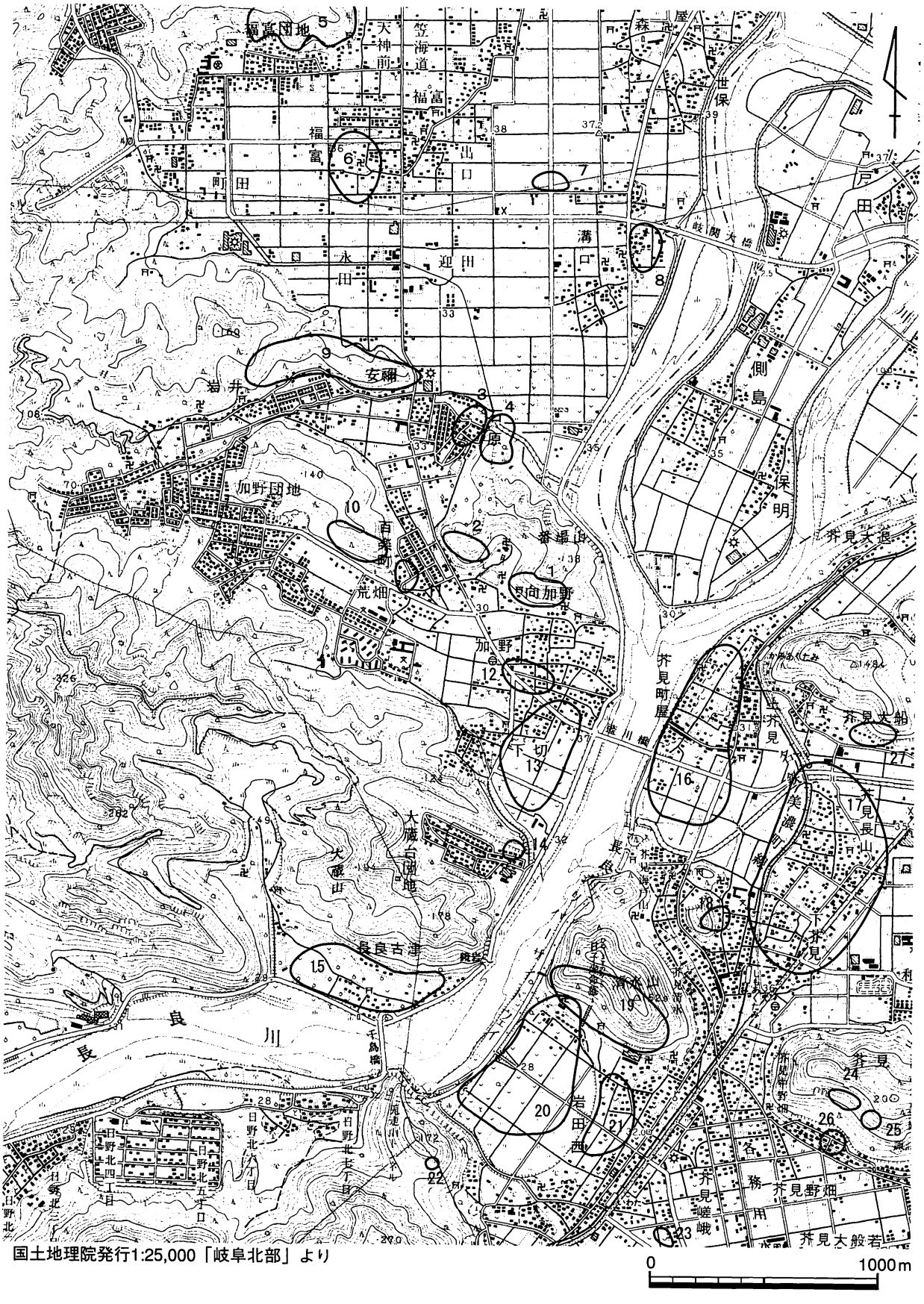
第３古墳群（３）は最も北の尾根から西側斜面にかけて11基存在していたが、昭和44年に滅失した。外形はいずれも円墳で、直径10m以下のものが多い。内部主体は横穴式石室で、川原石を使用している。遺物は１号古墳から勾玉、管玉、直刀、鉄鏃、須恵器、２号古墳から須恵器、４号古墳から直刀、須恵器（坏・高坏・壺・平瓶）、土師器、５号古墳から土師器、６号古墳から金環、土師器、10号古墳から土師器が出土している。

第４古墳群（４）は丘陵の東山麓にあり、８基から成る。外形はいずれも円墳で、規模の大きい古墳で７号古墳の直径14m、高さ3.5m、小さい古墳で２・４号古墳の直径９m、高さ2.5mである。内部主体はいずれも横穴式石室である。遺物は１号古墳から勾玉、管玉、土師器、４号古墳から刀子、鉄鏃、須恵器（高坏・壺）、６号古墳から直刀、鉄鏃、土師器（壺）が出土している。４・６号古墳の石室内にある石棚は極めて特異なものとされている。

また、反田番場山古墳群周辺には、後期古墳が幾つか分布している。

表１　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	時代
1	七反田番場山第１古墳群	古墳群	古墳
2	七反田番場山第２古墳群	古墳群	古墳
3	七反田番場山第３古墳群	古墳群	古墳
4	七反田番場山第４古墳群	古墳群	古墳
5	福富古墳群	古墳群	古墳
6	福富遺跡	散布地	古代～中世
7	福富出口遺跡	散布地	古代～中世
8	溝口中遺跡	散布地	中世
9	岩井古墳群	古墳群	古墳
10	北長塚古墳群	古墳群	古墳
11	北長塚遺跡	散布地	縄文
12	加野西畑遺跡	散布地	古代～中世
13	加野南遺跡	散布地	古代～中世
14	大蔵山古墳	古墳	古墳
15	長良古津遺跡	散布地	
16	芥見町屋遺跡	散布地	古代～近世
17	芥見長山遺跡	集落跡	古代～中世
18	簑笠山古墳群	古墳群	古墳
19	岩田古墳群	古墳群	古墳
20	岩田西遺跡	散布地	古代～中世
21	岩田東Ａ遺跡	散布地	古代～近世
22	鍋坂古墳	古墳	古墳
23	岩田東Ｂ遺跡	散布地	旧石器
24	朝倉古墳群	古墳群	古墳
25	朝倉窯跡群	古窯跡群	奈良
26	朝倉遺跡	散布地	縄文
27	大船古墳群	古墳群	古墳



国土地理院発行1:25,000「岐阜北部」より

図３　周辺遺跡位置図

福富古墳群（５）は６基の円墳から成る。規模の大きい古墳で１号古墳の直径13m、高さ3.0m、小さい古墳で４号古墳の直径８m、高さ2.0mである。内部主体はいずれも横穴式石室である。遺物は１号古墳から環頭柄頭、馬具、須恵器（坏）が、３号古墳から須恵器（坏）が、５号古墳から須恵器（高坏・壺）が出土している。時期は７世紀前半である。

大蔵山古墳（14）は大正14年に発掘され、再び埋め戻されている。外形は円墳、内部主体は横穴式石室で、内部には砂岩製の長持型石棺があり、人骨が遺存していた。遺物は須恵器（坏）が出土している。時期は６～７世紀である。

簑笠山古墳群（18）は２基の円墳から成り、１号古墳は直径12m、高さ2.4m、２号古墳は直径８m、高さ1.8mである。内部主体は不明であるが、１号古墳から須恵器（坏・平瓶・甕）などが出土した。時期は７世紀である。

岩田古墳群（19）は７基の円墳から成る。規模の大きい古墳で１号古墳の直径16m、高さ3.0m、小さい古墳で３号古墳の直径８m、高さ1．2mである。内部主体はいずれも横穴式石室である。遺物は２号古墳から須恵器（坏・高坏）が、５号古墳から須恵器（坏・高坏・瑳）が、６号古墳から須恵器（高坏）が出土している。時期は６～７世紀である。

朝倉古墳群(24)は４基の円墳から成り、大正年間に発掘調査がなされたが昭和42年に滅失した。規模は７～11mで、内部主体はいずれも横穴式石室である。遺物は１号古墳から金環、直刀、須恵器（高坏・平瓶)、２号古墳から須恵器（高坏・壺)、鉄片、３号古墳から管玉、須恵器（壺・瑳)、４号古墳から須恵器（坏・壺）が出土している。時期は６～７世紀である。

大船古墳群（27）は２基以上の古墳の存在が考えられている。１・２号古墳ともに外形は円墳で、直径10m、高さ１～２mで内部主体は横穴式石室である。遺物は須恵器（坏・高坏・平瓶・提瓶・壺など）が出土している。時期は６～７世紀である。

このように、当遺跡周辺の古墳は大半が円墳で、内部主体は横穴式石室を有する。そのなかで、福富古墳群出土の環頭柄頭と馬具は、被葬者の階層性の高さを知る資料として重要である。

周辺の遺跡では詳細分布調査により、主に古代から近世の遺物が採集されている。

福富出口遺跡（７）では、須恵器、白瓷、白瓷系陶器など、古代から中世の遺物が採集されている。

加野南遺跡（13）では、古代から中世の遺物が採集されており、特に中世の遺物が多量に散布している点が特徴である。なかでも、土師器皿や青白磁合子蓋の存在は注目される。

長良古津遺跡（15）では、白瓷や白瓷系陶器、瀬戸美濃陶器（大窯、連房）などが採集されており、特に中近世の遺物が多い。

芥見町屋遺跡（16）では、土師器、須恵器、白瓷、白瓷系陶器、土師器皿、古瀬戸、瀬戸美濃陶器(連房)、青磁、製塩土器など、古代から近世の遺物が採集されている。

芥見長山遺跡（17）では、昭和55年の発掘調査により竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡３棟、土坑43基、溝２条などの遺構を検出している。その時期は概ね８世紀中葉から９世紀初頭と考えられている。出土遺物は須恵器と土師器が多く、なかでも三彩の出土は注目できる。分布調査では、須恵器や土師器、白瓷、白瓷系陶器、土師器皿、白磁など、古代から中世の遺物が多量に採集されている。

岩田東Ａ遺跡（21）では、土師器、須恵器、白瓷、白瓷系陶器、瀬戸美濃陶器（連房）など、古代から近世の遺物が採集されている。

第３章　　調査の結果

第１節　基本層序

６層を古墳時代の表土（旧表土）として捉え、その下層を地山とした。周溝・石室は旧表土と地山を掘り込んで構築され、墳丘はその土を盛って造築されている。その上層については、斜面上方からの流土が堆積している。流土層は調査区北壁では細かく分層できなかったが、11号古墳の試掘確認調査のトレンチでは４層に分層できた。

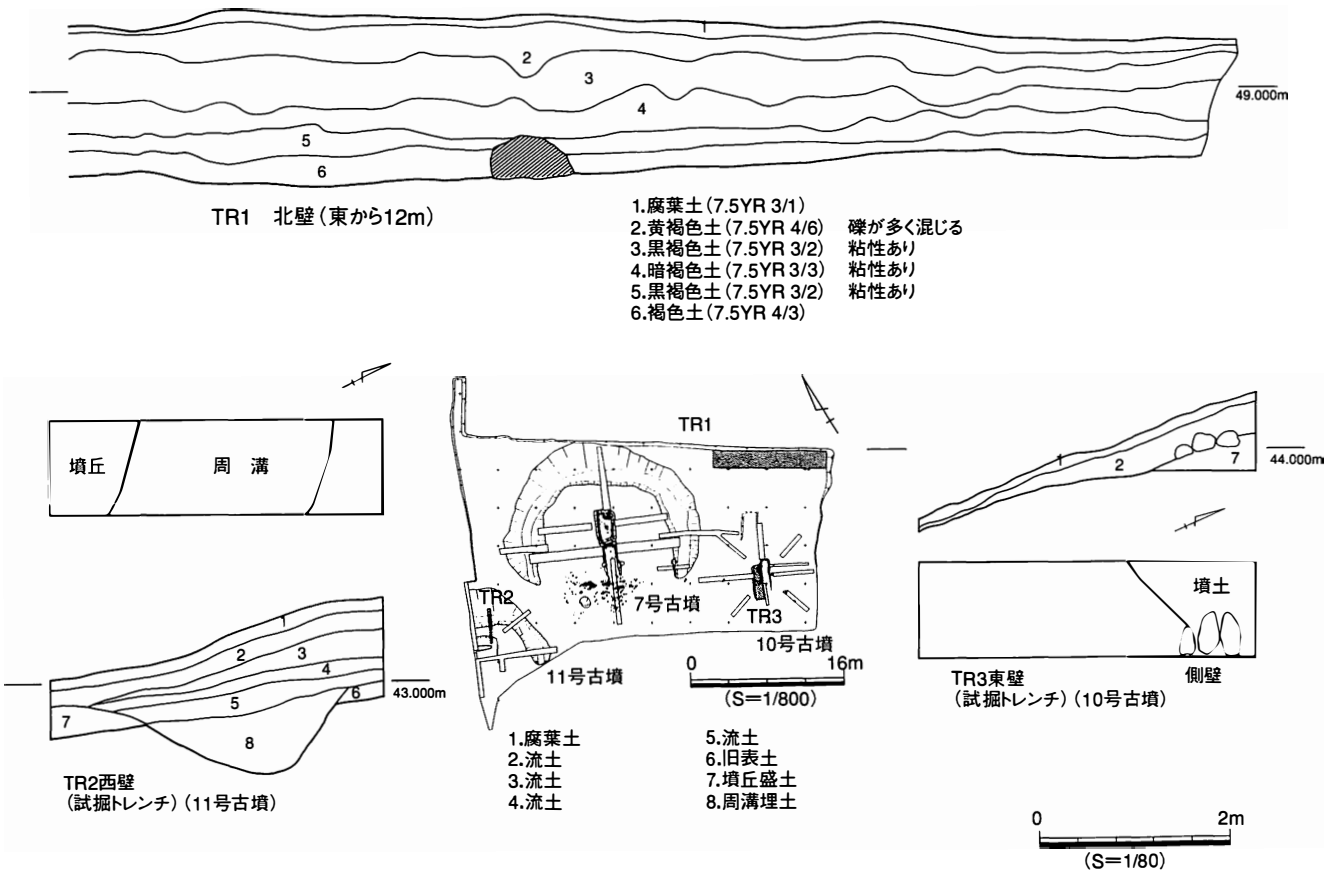


図４　基本層序

第２節　遺構と遺物の概要

７・10・11号古墳は、標高137.8mの番場山と呼ばれる独立丘陵の南端、標高40～48mの南東向きの斜面上に造築されている。この番場山の山麓には第１～４古墳群からなる番場山古墳群があり、調査区域は第１古墳群に属している。番場山南方には平地が広がっており、古墳の被葬者の生業は主にこの平地であったと考えている。

７号古墳は横穴式石室をもつ円墳で、調査区内では最大の規模をもつ。10号古墳も横穴式石室をもつ円墳であるが、周溝は検出できなかった。ともに石室が多数の川原石とチャートを混合して構築さ

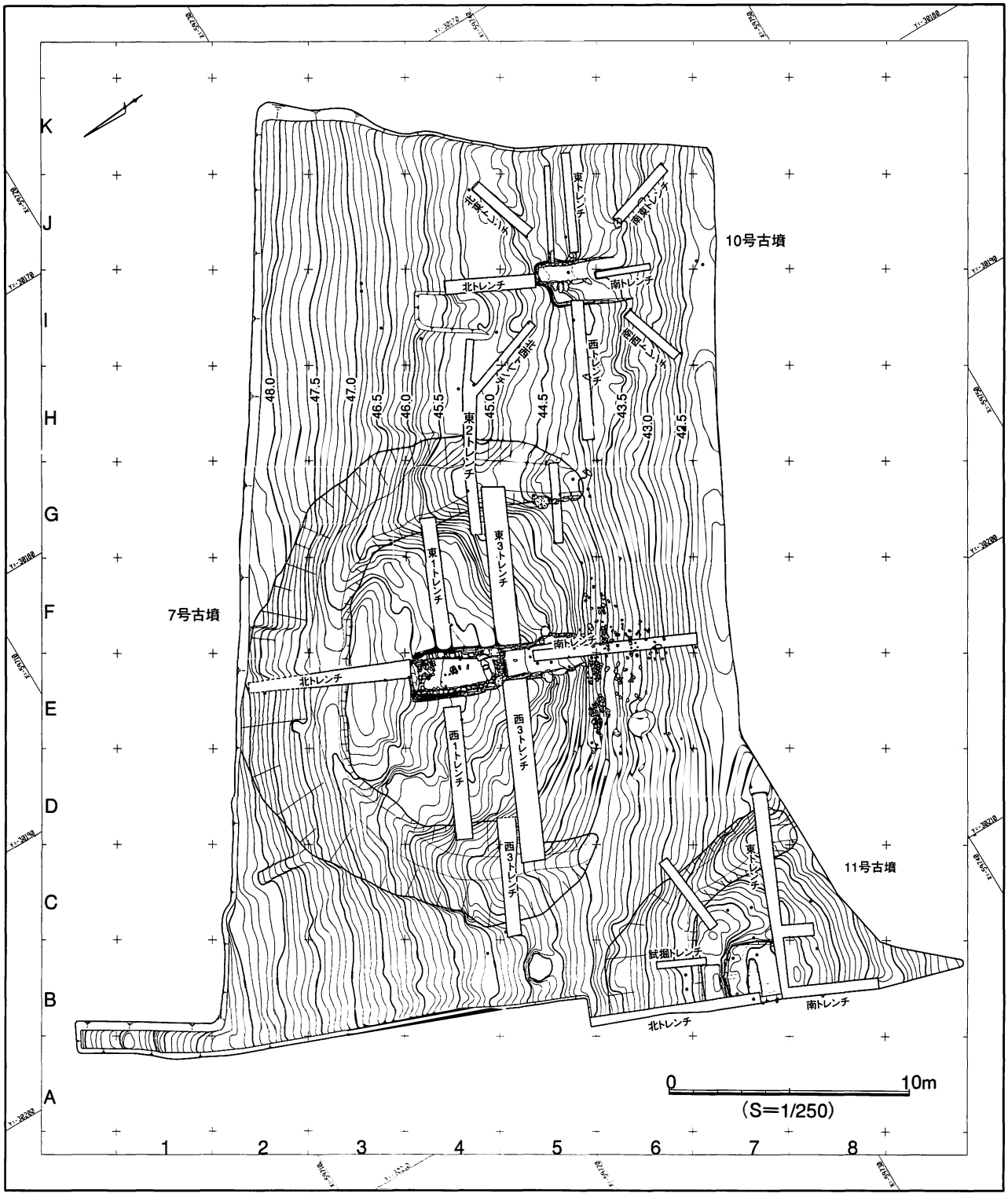

10号古墳
7号古墳
11号古墳
北トレンチ
南トレンチ
東トレンチ
西トレンチ
東2トレンチ
東3トレンチ
東1トレンチ
西1トレンチ
西3トレンチ
試掘トレンチ
48.0
47.5
47.0
46.5
46.0
45.5
45.0
44.5
43.5
43.0
42.5
0
10m
(S=1/250)
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
1
2
3
4
5
6
7
8

図５　調査区全体図

れている点に特色がある。11号古墳は石室をもたない木棺直葬の古墳であり、他の２基の古墳とは時期が異なる。また、11号古墳については墳丘及び周溝の一部のみは調査区外に位置しているため、その全貌は明らかでない。

７号古墳は天井石として配置されたチャートが地表に露出し、石室が開口している状態であった。地元住民の話では、加野地区は戦前までは低湿であり、水害を避けるため、この開口部分に食糧などを備蓄したり、古墳の開口部に入って遊んだこともあったということである。また、調査区の西に位置する西光寺には番場山からの石が多数持ち込まれているということから、番場山の多くの古墳については後世の攪乱が行われているものと想像できる。なお、古墳以外の遺構は確認していない。

遺物は７号古墳の石室・墳丘・周溝、11号古墳の墓坑・周溝、包含層などから出土し、10号古墳からは出土していない。出土した全遺物の内訳は、接合後の破片数で須恵器71点、土師器55点、瀬戸美濃（連房）陶器２点、金属製品３点、石器１点、瓦３点、合計135点である（接合前では合計274点である）。なお、須恵器の分類、編年観、産地同定については渡邉博人氏に御指導いただいたが、文責は執筆者にある。

第３節　７号古墳（図６～13）

１　概要

７号古墳は調査区の中央に位置し、南東方向の10号古墳とは約17m隔てて隣接し、南西方向の11号古墳とは約18m離れている。直径約13.8mの円墳で調査区内で最大の古墳である。発掘調査前の状況は、天井石として配置されたチャートが地表面に露出した状態で石室が開口し、腐葉土などが堆積していた。その天井石は西側壁にかかり、東側壁が崩れて下方に落ち込み、傾いた状態であった。また、側壁は主に川原石を多く使用して構築されているため、その崩落・崩壊状況は激しく、調査前の予想を超えるものであった。

遺物は玄室・羨道・周溝から出土しているが量は多くない。後世においては信仰の対象にもなっていたらしく、開口部分から銭貨（寛永通寶）が、墳丘から近世陶器がそれぞれ出土した。

２　墳丘

墳形は古墳北側は円形であるが、東側の裾で検出した外護列石は直線状に並んでいる。その他の部分では外護列石は斜面下方に流れ落ちてしまったと考えられ、確認できなかった。また、古墳南側の墳形は円形ではなく直線的な形となるが、これは斜面の立地条件によるものと思われる。以上のことから、７号古墳の墳形は円形と判断した。また、検出した周溝・外護列石から想定できる墳丘の規模は直径約13.8mである。

墳丘の元来の高さについては、側壁が崩れていること、天井石の大半が失われていること、残存している天井石が原位置を保っていないこと等などから不明である。

墳丘の構築状況は傾斜地形を利用して石室の基底部（旧表土・地山）を掘り込んで石室を構築し、その後、盛土をしている。また、墳丘断面の土層から石室の側壁を構築し、背後の裏込めを行い、その後に墳丘を造るための盛土をしていることを確認した。

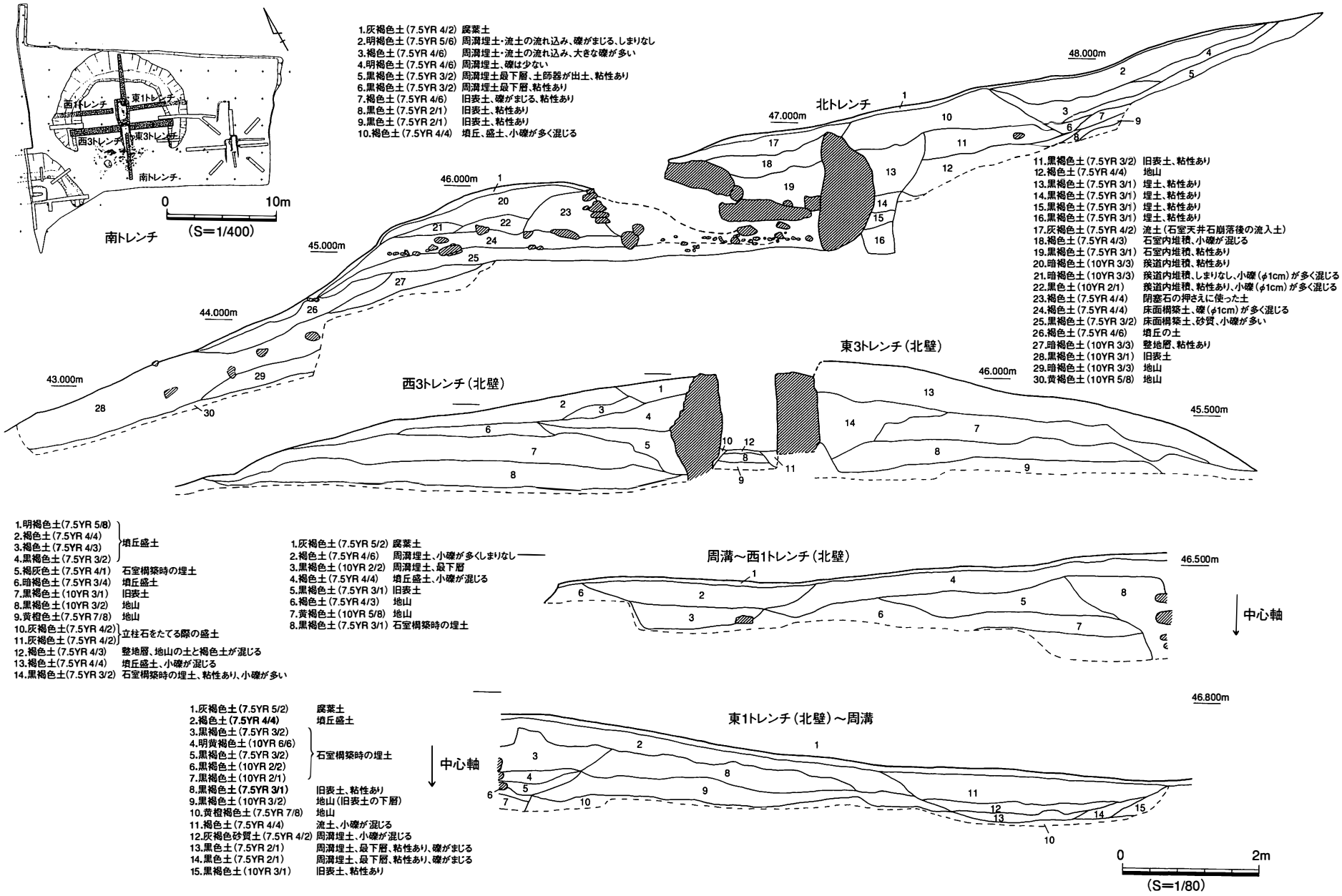


図6 7号古墳墳丘断面図

３　内部主体

７号古墳は南南東に開口する両袖式の横穴式石室である。主軸はＮ－22°－Ｗである。玄門よりやや北側の位置に長さ1.5mの天井石が露出していた。

玄室は長さ3.2m、幅約1.2m、羨道部は長さ2.8m、幅約１mである。玄室から羨道部にかけての西側の側壁は内傾していた。

奥壁は１枚のチャート（縦約1.6m、横約1.3m）を置いて構築されている。玄室の側壁については川原石を積み重ねて造られ、立柱石（チャート）を境にして羨道部の側壁は主にチャートを積み重ねて構築されている。構築方法は、山の斜面を地山部分まで削り、１段目は楕円形の川原石の長辺を南北に並べて置き、２段目では楕円形の川原石の長辺を東西に並べている。奥壁の高さは1.6m、側壁は残存状況の良い箇所で1.2mである。奥壁とほぼ同じ高さまで川原石の側壁が構築されていたと考えられるが、その大部分は崩落しており、床面に積み重なった状態で検出した。

天井石を石室において２枚、石室前方に流れ落ちたものを１枚確認している（石材はすべてチャート）。石室内の２枚の天井石のうち、北側のものは床面にまで崩落し、完全に圧着した状態である。調査区内で確認できた３枚の天井石では、石室全体を覆うには面積的にかなり不足する。何らかの理由から後世において撤去されたものや斜面下方へと流出したものがあったと考えている。

床面は崩落天井石の圧着部分より、北側のみが僅かに残っていた程度である。天井石の撤去後、遺物の上方にある礫や川原石・堆積土を取り除いた後の状態を床面とみなした。長さ10cm程度のチャートが雑に並べられており、これが礫床にあたると考えている。残存部分以外は攪乱により様相が不明である。また、断ち割りの結果、床面の構築は１回のみと判断した。さらに遺物にも時期差が見られないことから追葬は行われていないと判断した。この完存していた北側の床面は、崩落し床面に圧着した天井石によって、後世において出入りができない状態であるため、出土遺物は埋葬当時の原位置を保っていると考えている。

玄室の入口には川原石を雑に４つ並べて、玄室の床面より高くした構造の段をもつ。この段の上位レベルは羨道部の床面のレベルとほぼ一致していることから、意図してこのような石室の構造にしたものと考えている。

玄室と羨道部の境においては、閉塞石が設置され良好に残存していた。おもに拳大の川原石とチャートを使って構築されている。特に玄室内側（北側）の積み方が整然としている。また、羨道部（南側）方向からは多量の土を用いて押さえ、玄門を閉じて固定した形跡を確認している。

羨道の側壁は基底部に川原石を使用している箇所もあるが、大半はチャートを用いて構築されている。玄室の構築方法と同じように、地山まで掘削し、石を置いている。さらに、床面構築のための整地土を入れ、玄室内の段の高さに合わせている。また、この床面にチャートの側壁が割れて倒れていることから、羨道内部は空洞であったことが明らかである。

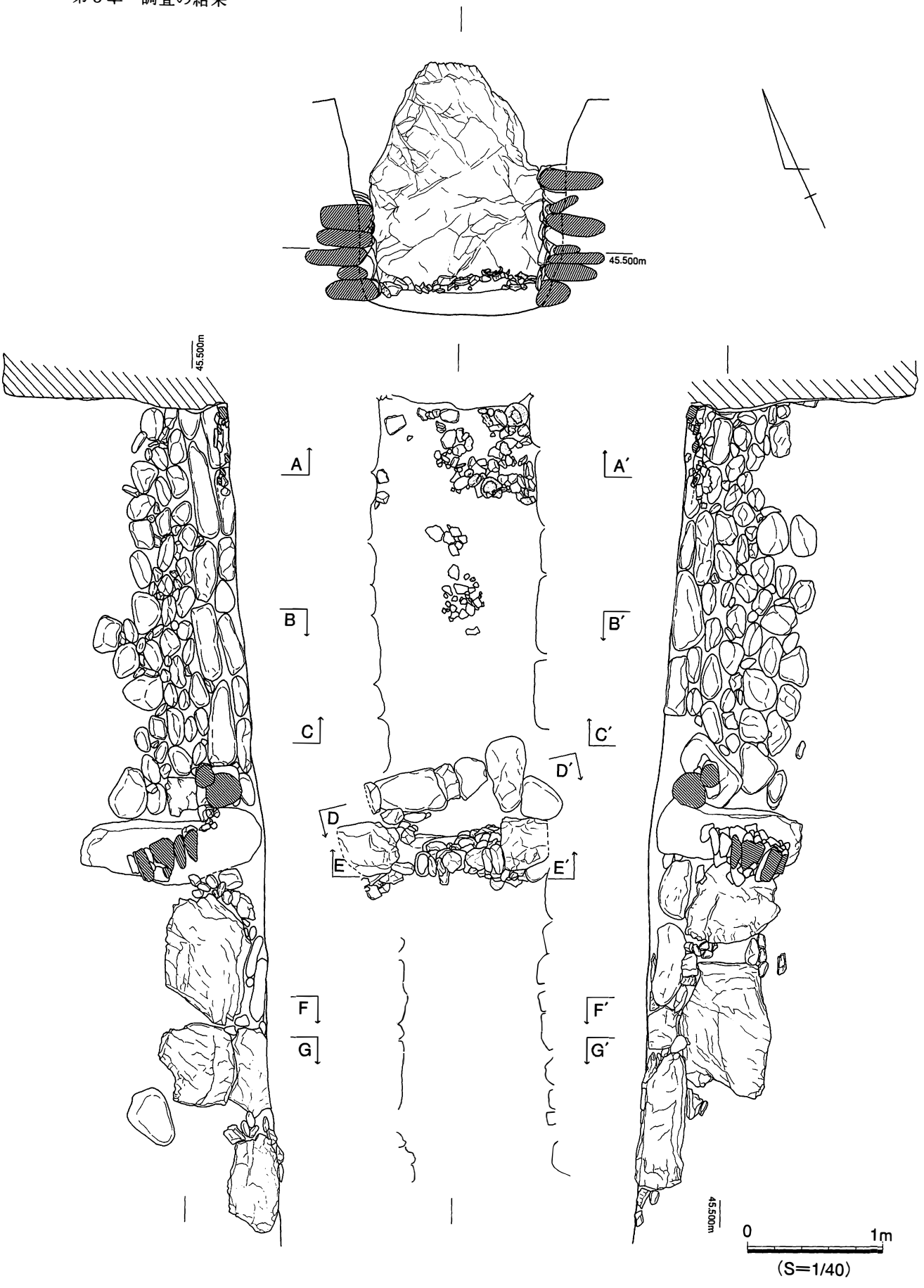


図７　７号古墳石室実測図（１）

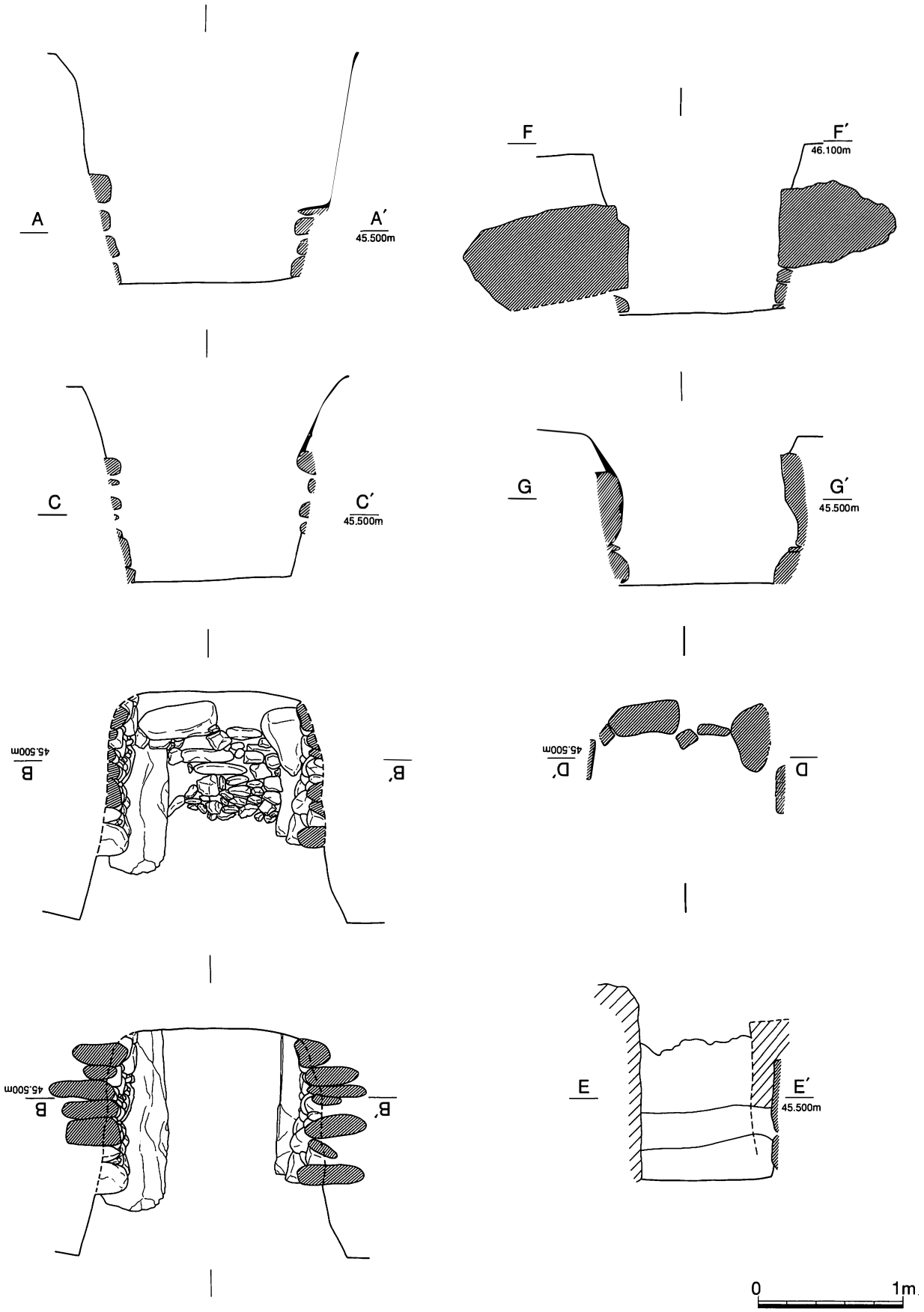


図８　７号古墳石室実測図（２）

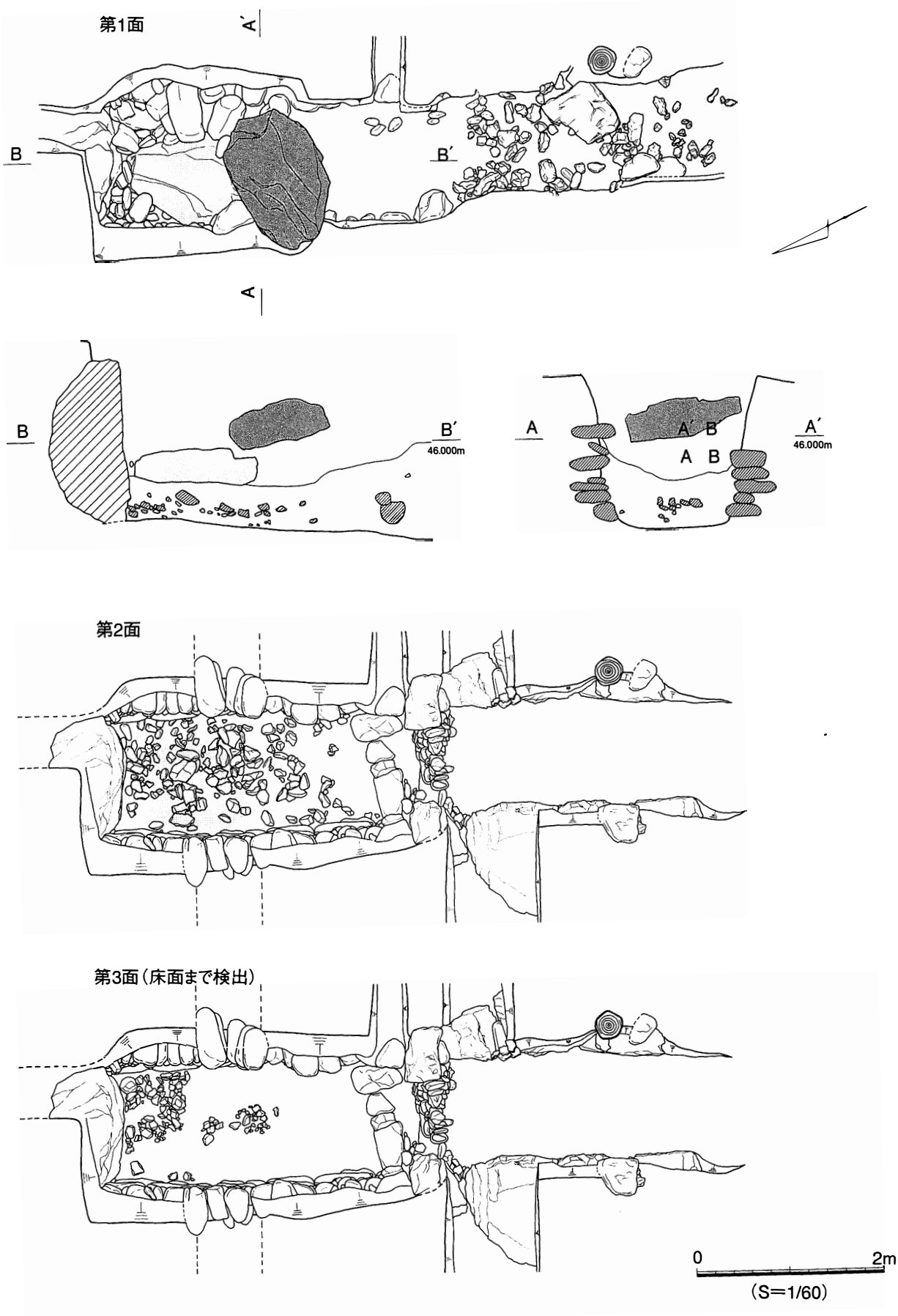


図９　７号古墳側壁石・天井石の崩落状況

4　周溝

墳丘の北側～両側方において周溝を確認した。斜面下方に向かうにつれ浅くなり消失し、石室正面では確認できなかった。確認した周溝は幅約７～８m、最も深い箇所で深さ約0.8mである。周溝内からは土師器片が出土している。

5　列石遺構

石室の前庭部において列石遺構を確認している。拳大の川原石・チャートが多く敷き詰められているが、残存状況は悪く、様相は不明である。また、並んでいるチャートの中には斜面上方から流れ落ちてきたもの（人為ではないもの）も多数含まれていると考えている。墳裾の南東方向では外護列石を確認した。川原石とチャートにより構築されているが残存しているのは２mとわずかの範囲であり、全貌は不明である。

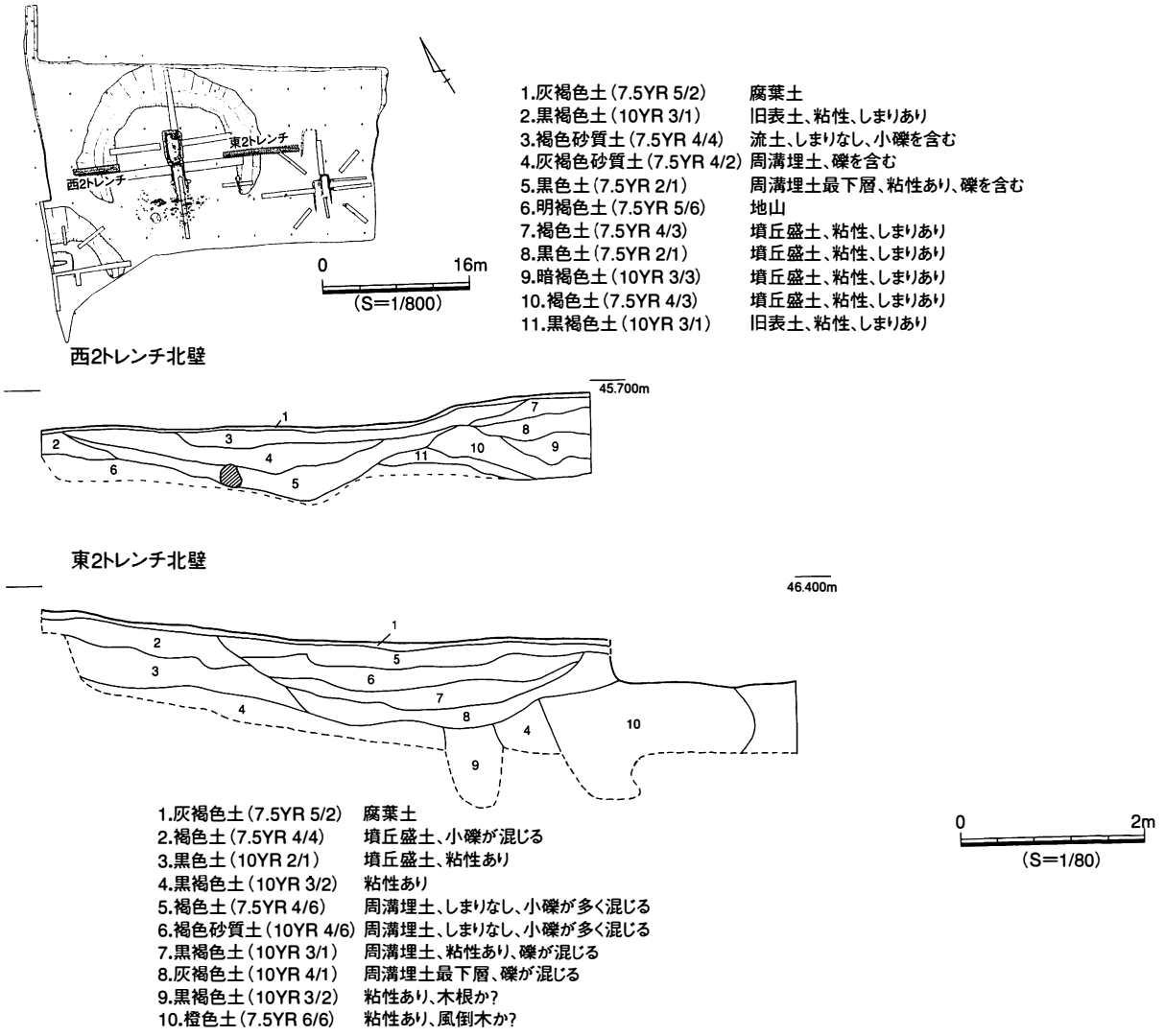


図10　７号古墳周溝断面図

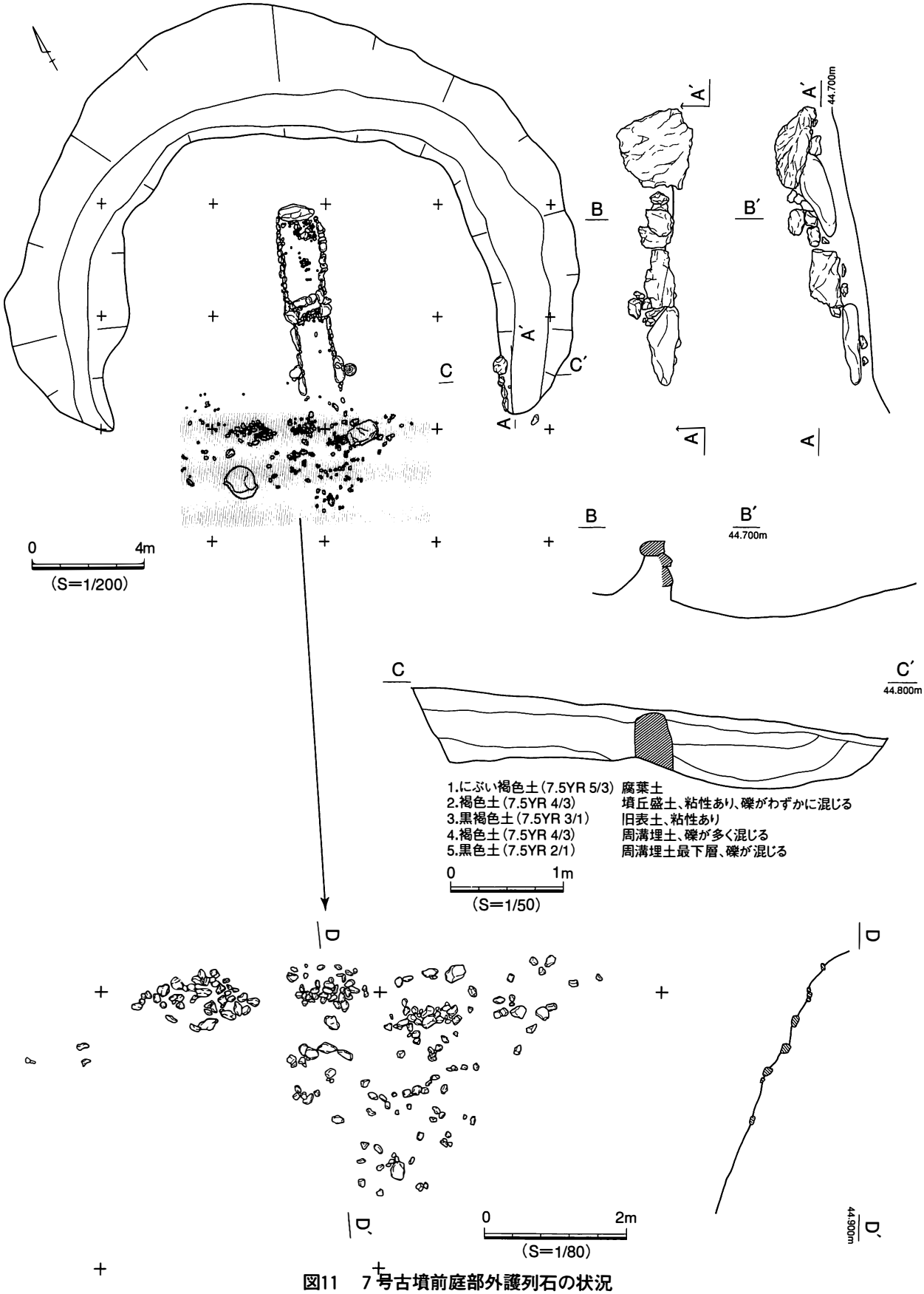


図11　７号古墳前庭部外護列石の状況

６　出土遺物

（１）遺物の出土状況（図13）

７号古墳の石室は開口している状態であったため、出入りが可能で後世の撹乱を受けている。そのため、石室内堆積土から出土した破片と羨道内堆積土から出土した破片が接合関係をもつなど、原位置を保っていないものが殆どである。ただし、崩落し床面に圧着した天井石の北側は、後世の撹乱を受けることがなくほぼ原位置を保っている可能性が高い。

（２）出土遺物点数

７号古墳からは、接合前の破片数で須恵器98点、土師器79点、石器１点、合計178点、接合後の破片数で須恵器55点、土師器41点、石器１点、合計97点が出土した。接合後の破片数の内訳は、須恵器が坏類31点、高坏19点、長頸壺２点、平瓶３点、土師器が甕34点、鍋５点、不明２点、石器は剥片１点である。

（３）出土遺物の説明

１～８は須恵器坏蓋である。１・２を除いて焼成があまく、灰白色～暗灰色を呈する。１は天井部外面下方まで回転ヘラ削りを施しているが、２～８の天井部が残っている破片の外面調整は、いずれも回転ナデである。

９～11は須恵器平瓶である。９と10は口頸部の破片だが、調整や色調、自然釉の降灰状況からみて11と同一個体の可能性が高い。11は底部外面中央付近には弧状に指圧痕が巡り、それに対応する底部内面はやや盛り上がっている。体部外面上方はカキメ調整がなされ、頸部と体部の接合部内面は板ナデが施されている。

12･13は須恵器長頸壺である。12は口縁部がわずかに内湾し、端部は尖り気味に仕上げられている。13の脚端部は約半周が細かく打ち欠かれ、接地面は平坦である。また、脚部外面中程には一条の突帯を有する。体部は中程に最大径を有し、外面に２条の沈線が巡る。

14～16は須恵器高坏の脚端部である。図化した破片以外にも高坏の脚部破片が出土しており、いずれも焼成があまく、灰白色～暗灰色を呈する。脚端部は強いナデにより屈折し、接地面は尖る。

17は土師器鍋である。底部から体部下方は丸く、体部上方はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は外反し、端部は明瞭な面取りが施されている。口縁部を除いてハケ調整がなされ、器面に煤などの付着物はみられない。

18･19は土師器甕である。周溝から出土した土器はこの２点のみであり、いずれも遺存状況は悪い。

20は瀬戸美濃（連房）の土瓶である。７号古墳の石室東側の墳丘より出土した。いわゆる糸目土瓶で、体部外面上方に平行沈線が多数施されている。底部外面は露体で、煤が付着している。耳部には直径８㎜の穿孔があり、上端には刻みが８箇所施されている。

なお、７号古墳の開口部付近で寛永通寶を１枚採集している。

須恵器のうち、焼成が良好な遺物は美濃須衛産、不良なものは美濃で焼成された畿内系須恵器である。時期はいずれも７世紀中頃であることから、７号古墳の時期は７世紀中頃といえる。

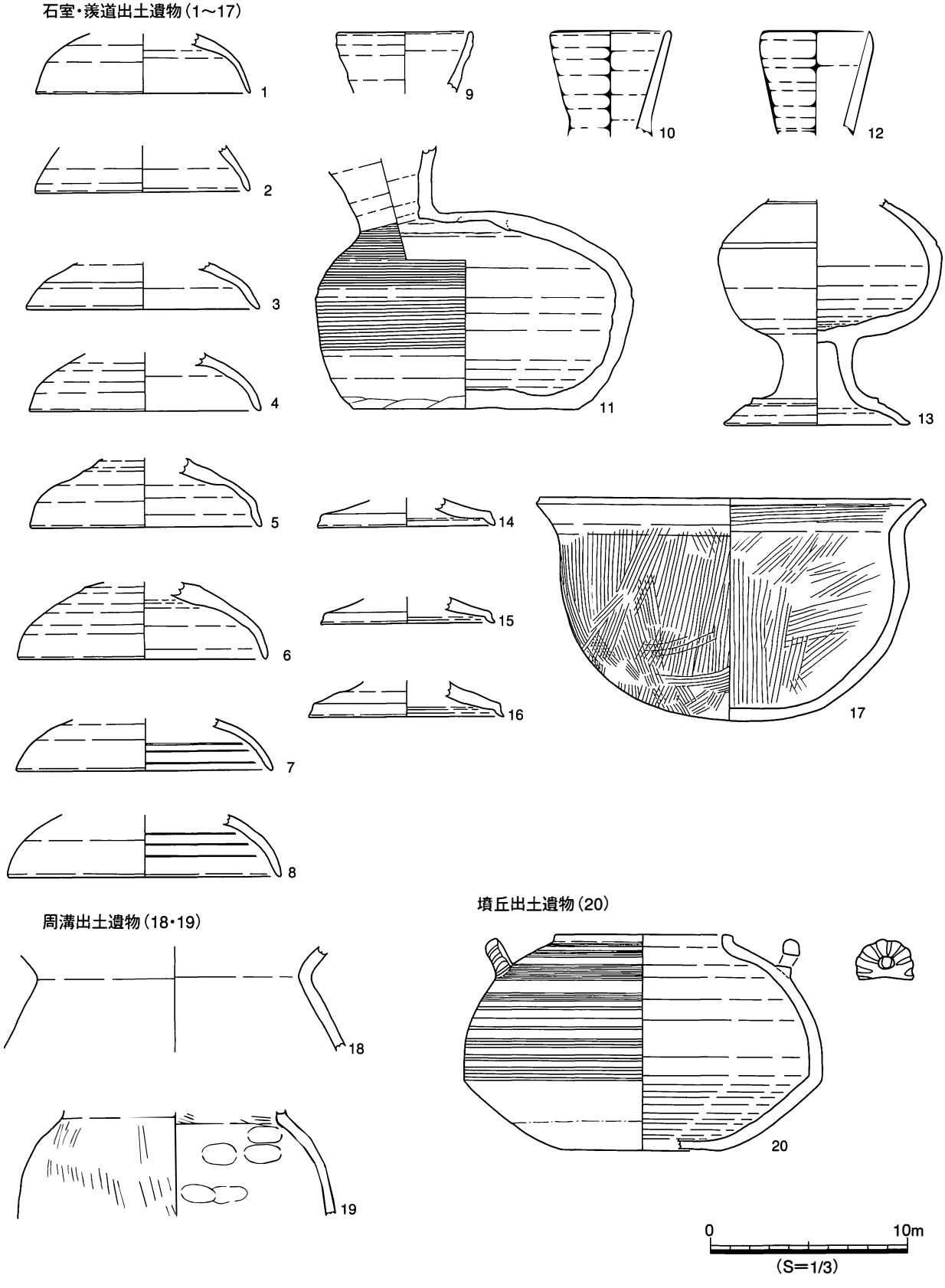


図12　７号古墳出土遺物実測図

表２　７号古墳出土遺物観察表

掲載番号	出土位置	グリッド	層位	遺物名	口径 底径 器高	調整	胎土	焼成	色調	口縁残存X/12	備考	実測番号	挿図	図版
1	７号 羨道	４Ｅ	堆積土	須恵器 坏蓋	(11.0) － －	口縁部～天井部外面下方回転ナデ、天井部外面上方回転ヘラ削り、天井部内面回転ナデ	直径１～２㎜の白色粒をわずかに含む。砂質。	良好	灰白色 (2.5Y7/1)	1.6	美濃須衛産	16	12	10
2	７号 石室	４Ｅ	床直上	須恵器 坏蓋	(11.0) － －	口縁部～天井部内外面回転ナデ	やや粗、径１㎜の白色粒をわずかに含む。砂質。	良好	灰白色 (5Y8/1)	3.8	美濃須衛産	13	12	10
3	７号 石室	４Ｅ	床直上	須恵器 坏蓋	(11.9) － －	口縁部～天井部内外面回転ナデ	やや粗、径１㎜の白色、灰色粒をわずかに含む。砂質。	不良	灰白色 (2.5Y8/2)	2.0	畿内系	8	12	10
4	７号 石室	４Ｅ	床直上	須恵器 坏蓋	(12.0) － －	口縁部～天井部内外面回転ナデ	やや粗、径１㎜の白色、灰色粒をわずかに含む。砂質。	不良	灰白色 (2.5Y8/2)	3.0	畿内系	7	12	10
5	７号 石室	４Ｅ	堆積土 床直上	須恵器 坏蓋	12.0 － －	口縁部～天井部内外面回転ナデ	やや粗、径１～２㎜の白色、灰色粒をわずかに含む。砂質。	不良	灰白色 (5Y8/1)	12.0	畿内系	3	12	10
6	７号 石室	４Ｅ	床直上	須恵器 坏蓋	(12.9) － －	口縁部～天井部内外面回転ナデ	やや粗、径１～２㎜の白色、灰色粒をわずかに含む。砂質。	不良	灰白色 (2.5Y8/2)	4.5	畿内系。外面にあばた状の窪みがある。	4	12	10
7	７号 石室	４Ｅ	床直上	須恵器 坏蓋	(13.2) － －	口縁部～天井部内外面回転ナデ	やや粗、径１㎜の白色、灰色粒をわずかに含む。砂質。	不良	灰白色 (2.5Y8/2)	3.6	畿内系。内面に沈線状の窪みがある。	9	12	10
8	７号 石室	４Ｅ	堆積土	須恵器 坏蓋	(14.0) － －	口縁部～天井部内外面回転ナデ	やや粗、径１㎜の白色、灰色粒をわずかに含む。砂質。	不良	灰白色 (2.5Y8/2)	3.6	畿内系。内面に沈線状の窪みがある。９と同一個体の可能性あり。	11	12	10
9	７号 石室	４Ｅ	床直上	須恵器 平瓶	(6.2) － －	口頸部内外面回転ナデ	やや粗、径１㎜の白色粒をわずかに含む。砂質。	良好	浅黄橙色 (10YR8/3)	2.8	美濃須衛産。内面に自然釉降灰。１と同一個体か。	12	12	10
10	７号 石室	４Ｅ	堆積土	須恵器 平瓶	(12.2) － －	口頸部内外面回転ナデ	やや粗、径１㎜の白色粒をわずかに含む。砂質。	良好	浅黄橙色 (10YR8/3)	2.4	美濃須衛産。内面に自然釉降灰。１と同一個体か。	5	12	10
11	７号 石室	４Ｅ	堆積土 床直上	須恵器 平瓶	－ 11.5 －	底部外面指頭圧痕、体部外面下方回転板ナデ、上方カキメ、体部内面回転ナデ	やや粗、径１～２㎜の白色、灰色粒をわずかに含む。砂質。	良好	浅黄橙色 (10YR8/3)	－	美濃須衛産。体部外面と底部内面に自然釉降灰。胴径16.4cm	1	12	10
12	７号 羨道	４Ｅ	堆積土	須恵器 長頸壺	(5.8) － －	口頸部内外面回転ナデ	直径１㎜の白色粒をわずかに含む。砂質。	良好	灰黄色 (2.5Y7/2)	6.0	美濃須衛産。外面に自然釉降灰。２と同一個体か。	17	12	10
13	７号 石室	４Ｅ	堆積土 床直上	須恵器 長頸壺	－ (9.5) －	脚部内外面回転ナデ、体部外面下方回転ヘラ削り、体部外面上方～内面回転ナデ	やや粗、径１～２㎜の白色、灰色粒をわずかに含む。砂質。	良好	黄灰色 (2.5Y6/1)	－	美濃須衛産。体部内外面と脚部外面に自然釉降灰。胴径11.2cm	2	12	10
14	７号 石室	４Ｅ	堆積土 床直上	須恵器 高坏	(9.1) － －	脚部内外面回転ナデ	やや粗、径１㎜の白色、灰色粒をわずかに含む。砂質。	不良	灰白色 (2.5Y8/2)		畿内系	22	12	10
15	７号 石室	４Ｅ	床直上	須恵器 高坏	(9.0) － －	脚部内外面回転ナデ	やや粗、径１㎜の白色、灰色粒をわずかに含む。砂質。	不良	灰白色 (2.5Y8/2)		畿内系	14	12	10
16	７号 石室	４Ｅ	堆積土	須恵器 高坏	－ (10.0) －	脚部内外面回転ナデ	やや粗、径１㎜の白色、灰色粒をわずかに含む。砂質。	不良	淡黄色 (2.5Y8/3)		畿内系	6	12	10
17	７号 石室	４Ｅ	床直上	土師器 鍋	19.9 － －	底部～体部外面縦～斜めハケ、口頸部外面指ナデ、口縁部内面横ハケ、体部内面斜め～横ハケ	直径１㎜の白色粒をわずかに含む。	良好	橙色 (7.5YR7/6)	8.3		15	12	10
18	７号 周溝	２Ｅ	最下層	土師器 甕	－ － －	頸部内外面横ナデ、体部内面指圧痕	直径１～２㎜の白色、灰色、赤色粒を幾つか含む。	良好	灰白色 (2.5Y8/2)			19	12	10
19	７号 周溝	２Ｆ	最下層	土師器 甕	－ － －	体部外面縦ハケ、頸部外面横ナデ、内面横ハケ、体部内面横方向の指頭圧痕	直径１～３㎜の白色、灰色、赤色粒を幾つか含む。	良好	灰白色 (2.5Y8/2)			18	12	10
20	７号 墳丘	４Ｅ ５Ｇ	表土	瀬戸 美濃 土瓶	9.0 (8.0) 11.0	底部外面回転ヘラ削り、体部内外面～底部内面回転ナデ	直径１㎜の白色粒をわずかに含む。	良好	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	6.5	いわゆる糸目土瓶。底部外面と口縁端部を除いて錆釉が施される。	21	12	10

※法量の（　　）は推定値を示す

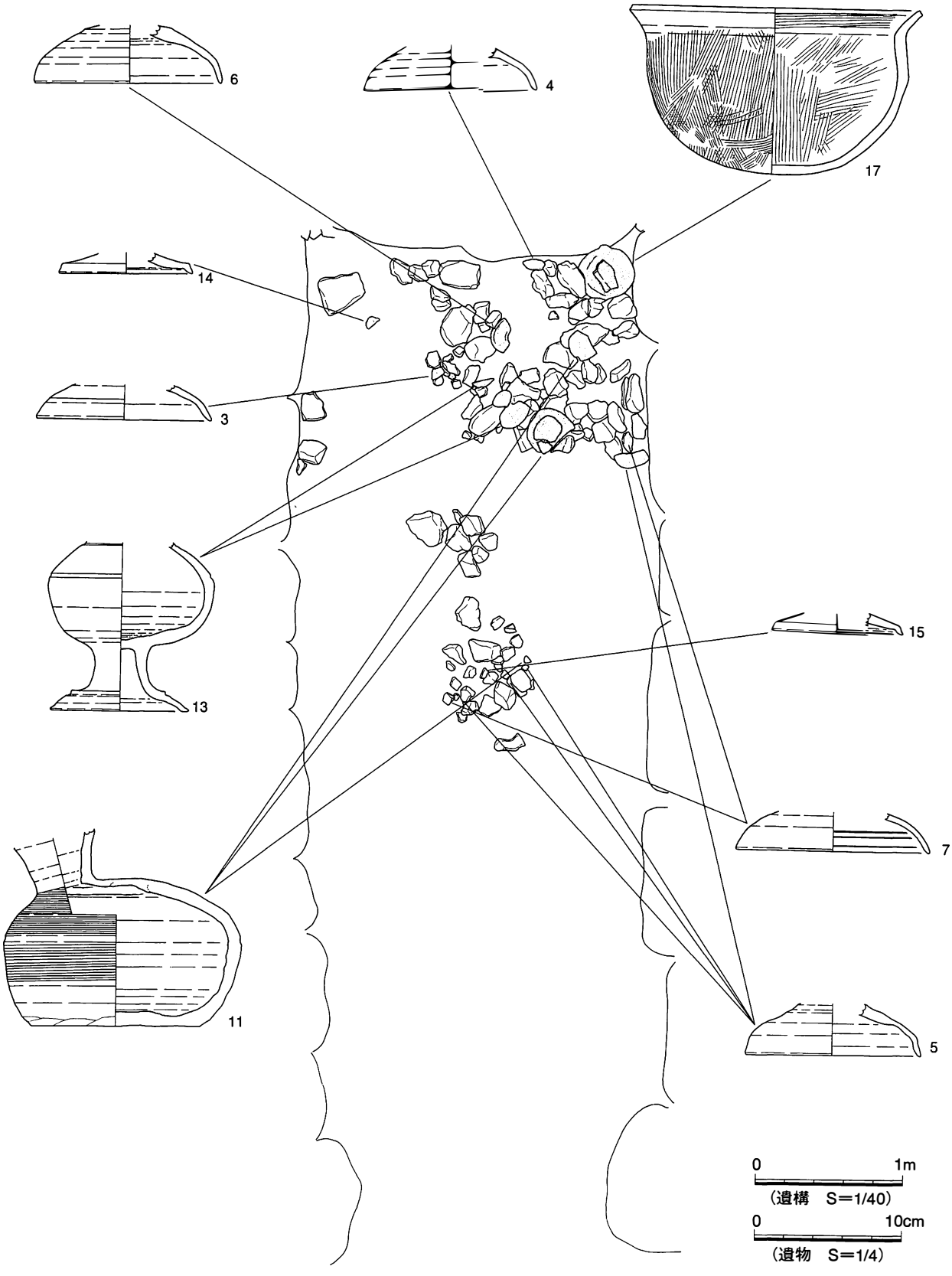


図13　７号古墳石室内遺物出土状況

第４節　10号古墳（図14～16）

１　概要

10号古墳は調査区の東方に位置し、北西方向の７号古墳とは約17m離れている。トレンチ調査において周溝が検出できなかったため、規模は不明である。調査前の地形は起伏の目立った変化はないが、試掘確認調査で川原石の側壁を検出し、その存在が判明した古墳である。７号古墳と比較すると規模は小さいが、チャートと川原石で構築された横穴式石室をもつ。また、石室内において遺物の出土は確認できなかった。

10号古墳床面の検出の途中で、石室北側にチャートと川原石からなる南北約128cm、東西約68cm、高さ約40cmの土盛りを検出した。側壁などが崩壊して積み重なったものか、意図して築造したものなのかは不明である。

２　墳丘

墳形は不明である。墳丘の構築状況は、傾斜地形を利用して石室の基底部（旧表土・地山）を掘り込んで石室を構築した後、玄室床面の盛土・整地をしている。墳丘断面の土層から石室の奥壁・側壁を構築し、背後の裏込めを行い、その後に墳丘を造るための盛土をしていることを確認した。しかし、墳丘の盛土の大部分は流れ落ちてしまっており、残存状況は非常に悪い。

３　内部主体

南南東に開口する横穴式石室で、主軸はＮ－24°－Ｗである。玄室は長さ1.8m、幅約0.6mである。

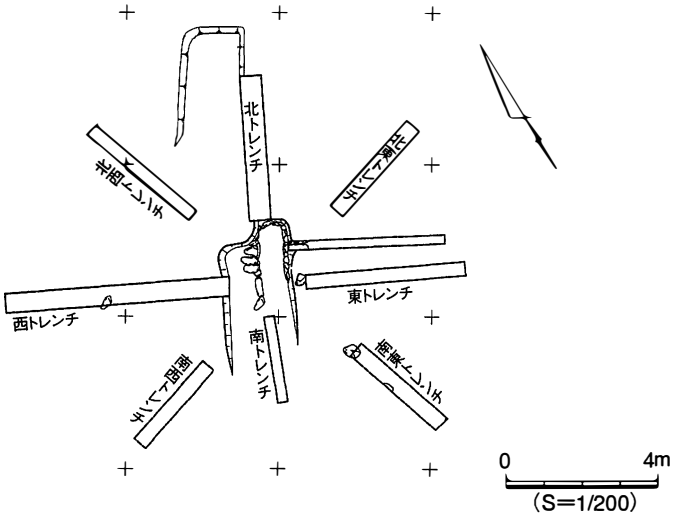
奥壁はチャート（高さ80㎝・幅46㎝・厚さ約15㎝）とその上に川原石・チャートを積み重ねており、不安定な状態である。玄室の側壁は川原石を積み重ねて構築されている。山の斜面を地山部分まで削り、土を入れて整地をした後、１段目は楕円形の川原石の長辺を南北に並べて置き、２段目では楕円形の川原石の長辺を東西に並べて構築している。奥壁の高さは１m、側壁は残存状況の良い箇所で0.8mある。

床面については、玄室内全体に礫床が残存していた。７号古墳と同様に10cm程度のチャートを雑に並べてあり、これを礫床と判断した。撹乱等の痕跡はないが、石室内において出土遺物は確認できなかった。また、断ち割りの結果、床面の構築は１回のみと判断した。

玄門石は置かれておらず、天井石は確認できなかった。また、羨道部も確認できなかった。

４　周溝

石室を中心として放射状に合計８本のトレンチを入れたが、周溝や外護列石は確認できなかった。調査前の地形をみても古墳特有の盛り上がった地形は確認できず、傾斜地であるために土砂の流出・堆積などにより、当時の墳形は変化してしまっていると考えられる。



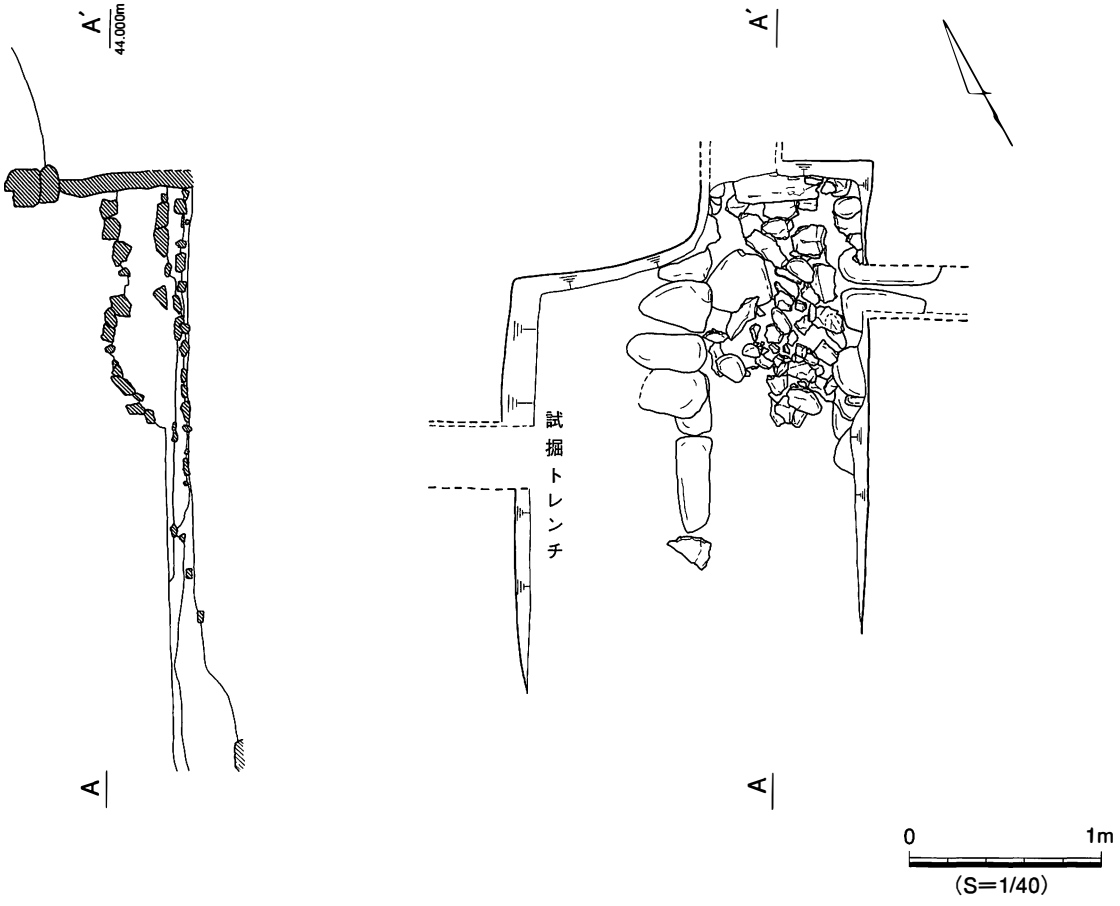
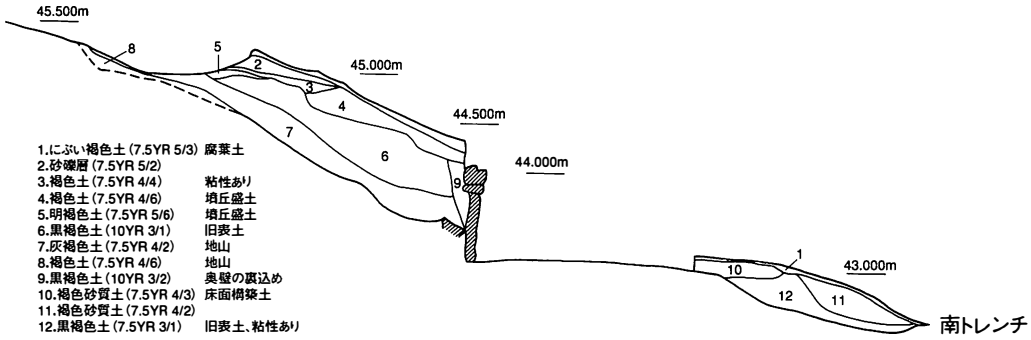
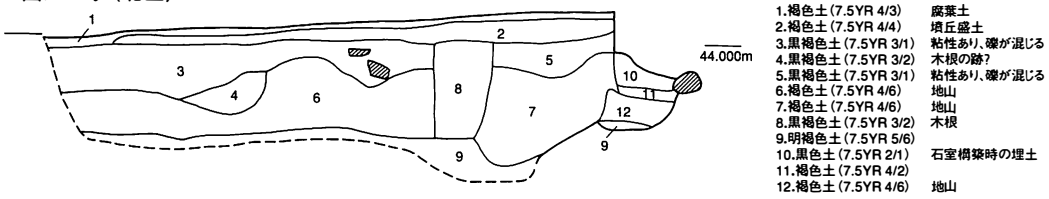


図14　10号古墳石室内石組み出土状況

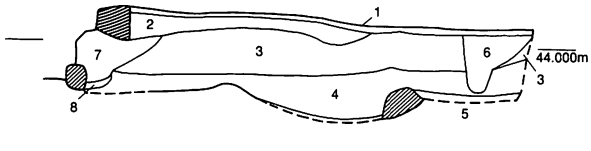
北トレンチ



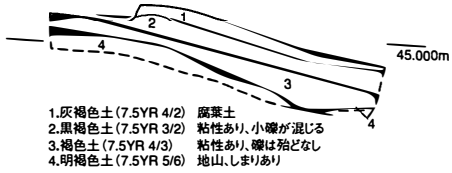
西トレンチ（北壁）



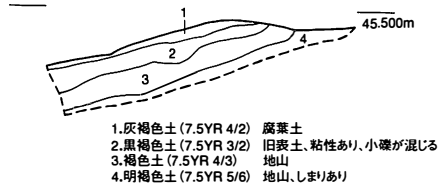
東トレンチ（北壁）



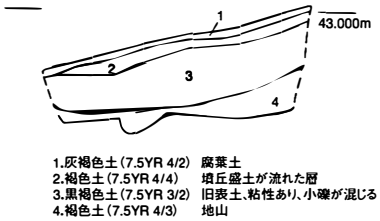
北西トレンチ



北東トレンチ



南西トレンチ



南東トレンチ

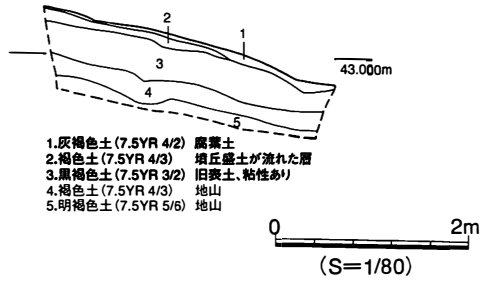


図15　10号古墳墳丘断面図

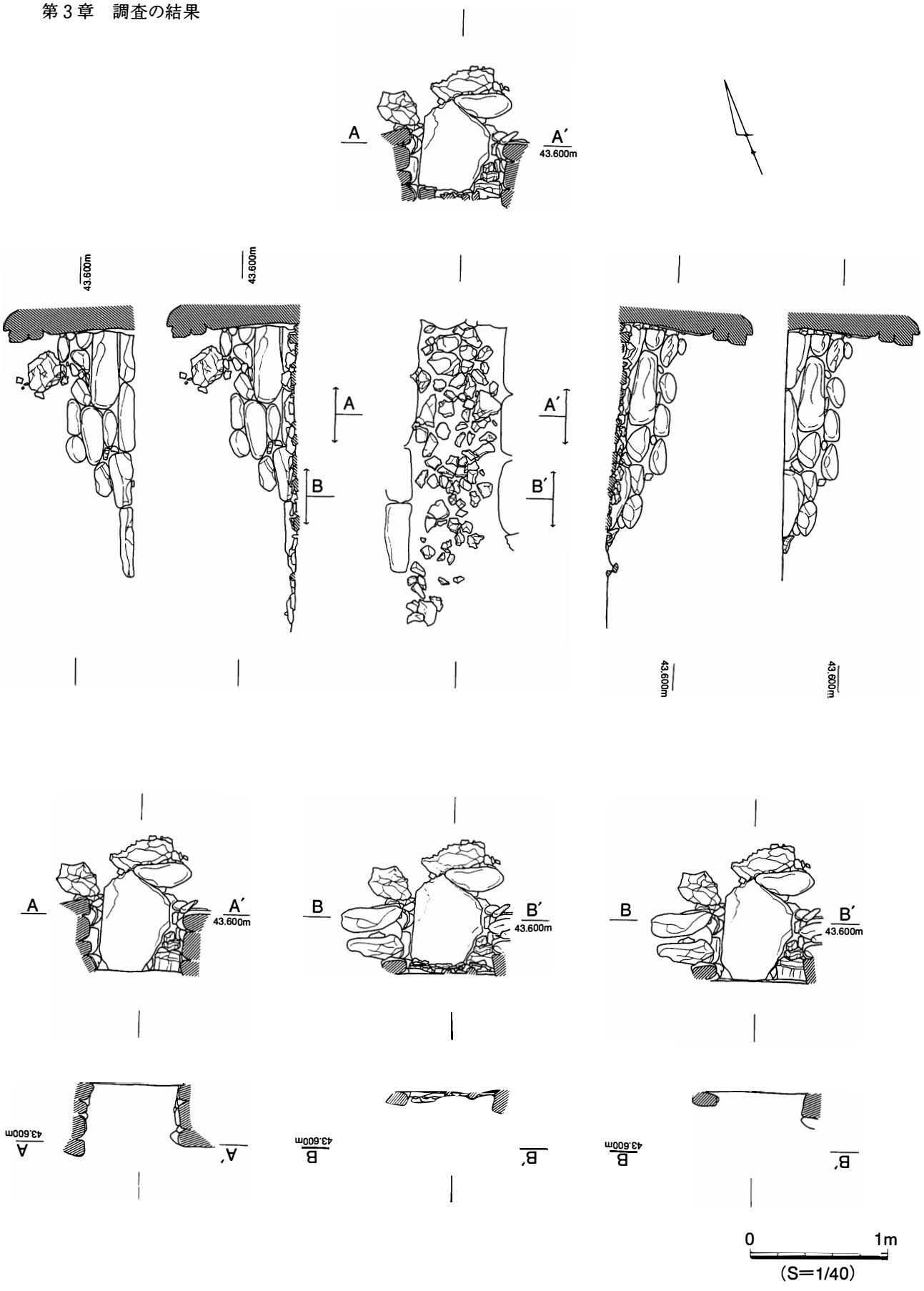


図16　10号古墳石室実測図

第５節　11号古墳（図17～22）

１　概要

11号古墳は試掘確認調査において周溝を検出し、その存在が明らかになった。調査区の西方に位置し、北東方向の７号古墳とは約18m離れている。木棺直葬の古墳であり、横穴式石室をもつ７号古墳とは築造された時期が異なる。11号古墳は西方に隣接する清水八幡神社の境内にまたがり、調査対象区域には周溝と墳丘の一部しかないため、全体は不明である。遺物は墓坑・周溝から出土している。

２　墳丘

盛土により墳丘を構築し、旧表土・地山部分を掘削して墓坑を設置し、埋葬後盛土をしている。

３　内部主体

11号古墳では、東方に位置する横穴式石室をもつ７・10号古墳とは異なり、木棺を直葬した墓坑を確認した。調査区内の墳丘中央部において東西2.7m、南北1.6mにわたり、細長い窪みが掘り込まれ、西方は調査区外（清水八幡神社）に続いている。また、墓坑の南側の一部は調査開始時に入れた東トレンチにより消失してしまった。

墳丘と墓坑の境界については土色が酷似しており、識別が困難であった。土色が黄～茶褐色土の長方形のプラン（調査区内においては東西1.8m、南北0.4m）を検出しているが、これは腐食し消失した木棺の跡と考えている。15cm程度の礫（チャート）が木棺跡の検出ラインの外側を廻っている様子から、木棺を石を用いて固定し、裏込めとしているといえる。

墓坑の東側には粘土塊が設置してある。粘土塊には長さ約15cm、幅約10cm、厚さ３～４cmの形状の整ったチャートが含まれていた。東トレンチ掘削時にも同様の粘土塊を確認したため、粘土塊についてはさらに南方に続いていたことがわかる。粘土塊はその上に遺物（提瓶・小型壺）が置かれており、遺物の出土レベルは床面よりも高い。この粘土塊は棺の固定に使用されたものと考えている。

墓坑内においてはベンガラを確認している（図19下）。その分析については第４章に掲載した。

４　周溝

周溝は旧表土・地山部分まで掘削しており、墳丘の北側～東側において確認した。西側（調査区域外）にも周溝が続いており、南側は斜面下方に向かうにつれ浅くなり消失する。調査区南方境は工事のために斜面が削り取られているため詳細は不明であるが、周溝は墳丘南面まで巡らないと考えている。確認した周溝は幅約２～４m、最も深い箇所で深さ約0.8mである。周溝内からは土師器片・須恵器片が出土している。

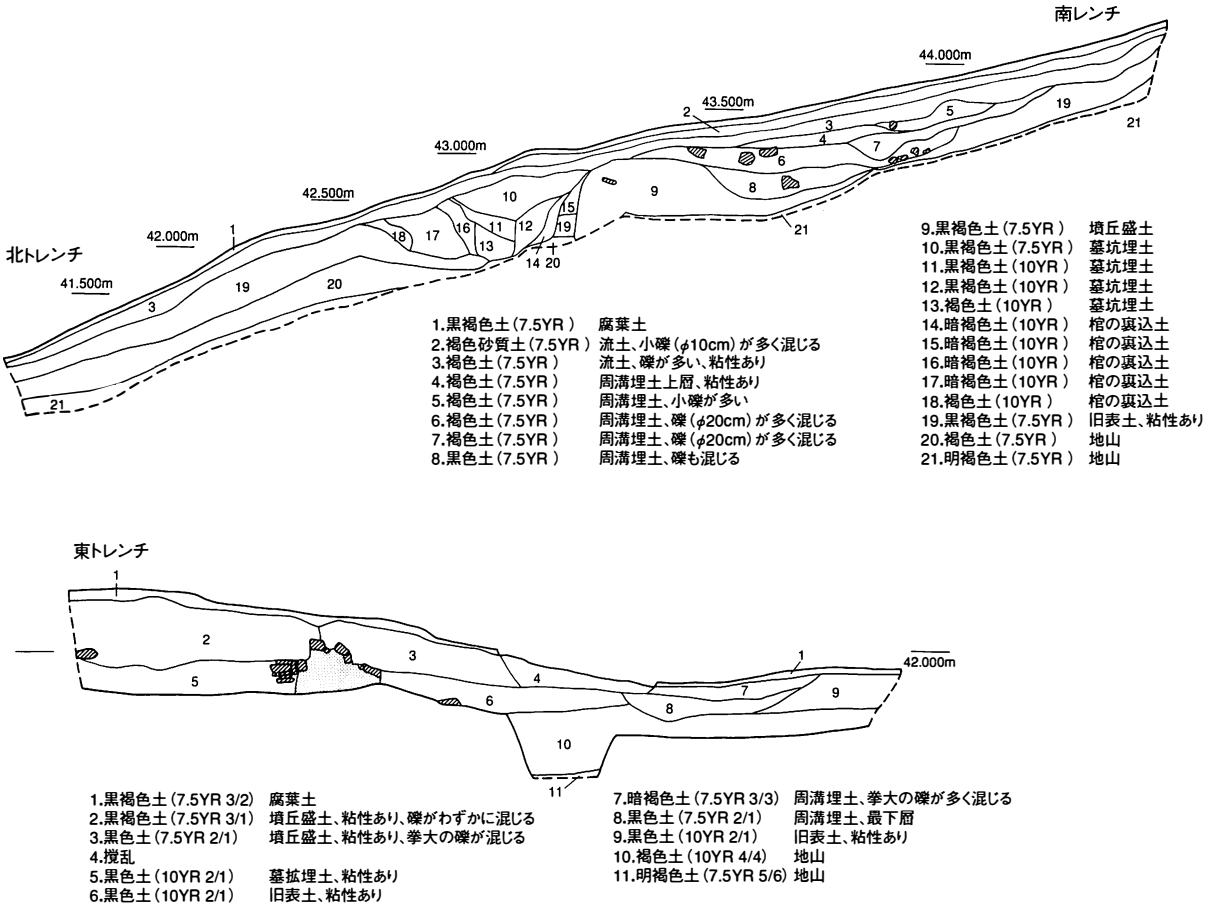


図17　11号古墳墳丘断面図

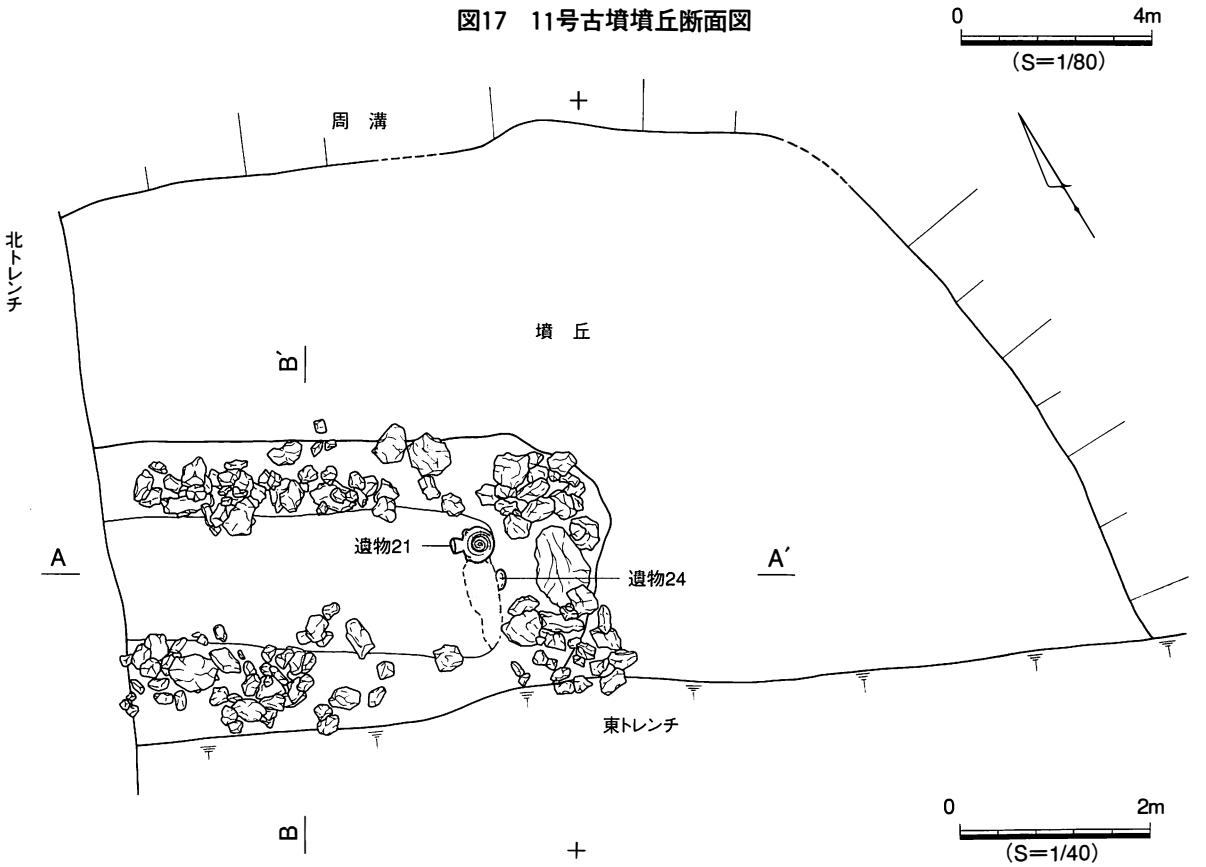
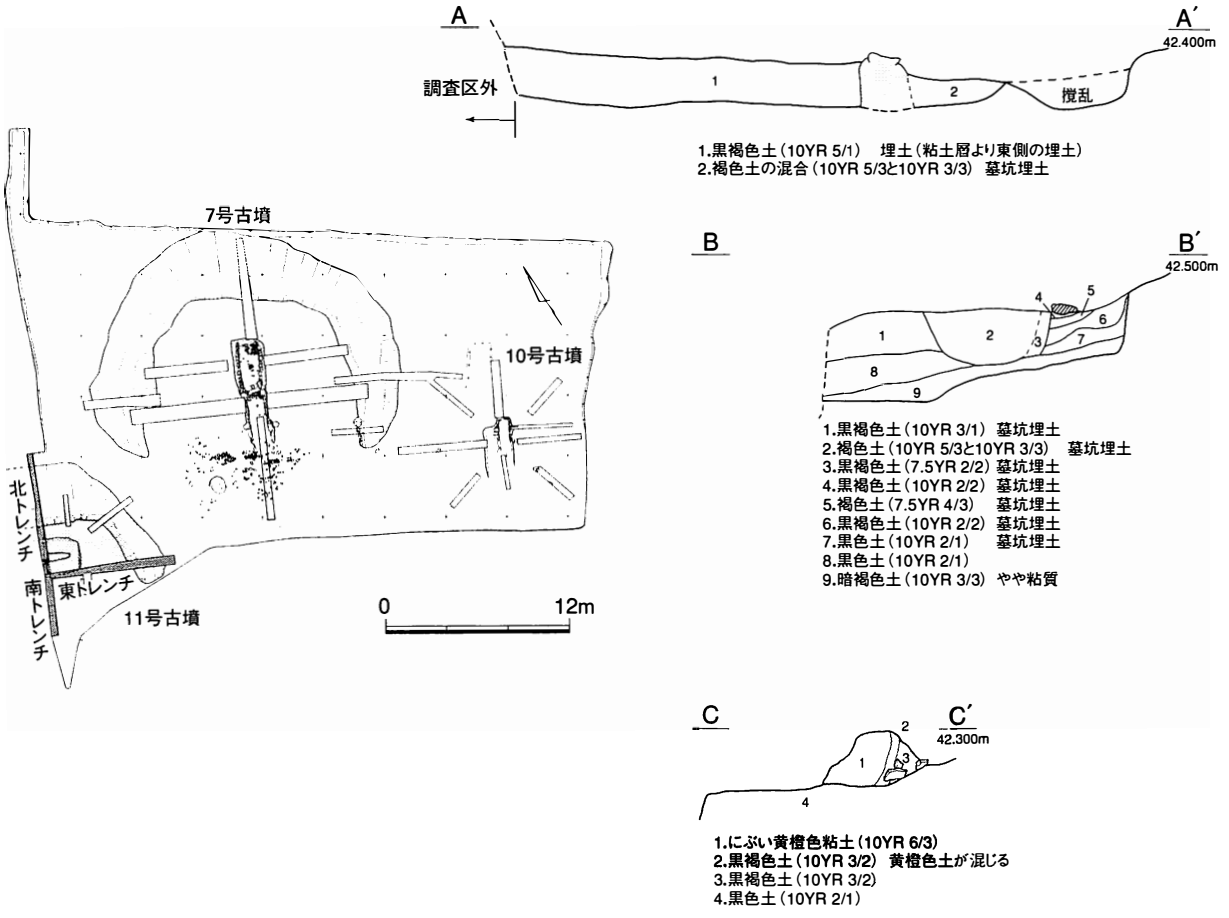


図18　11号古墳墓坑検出状況



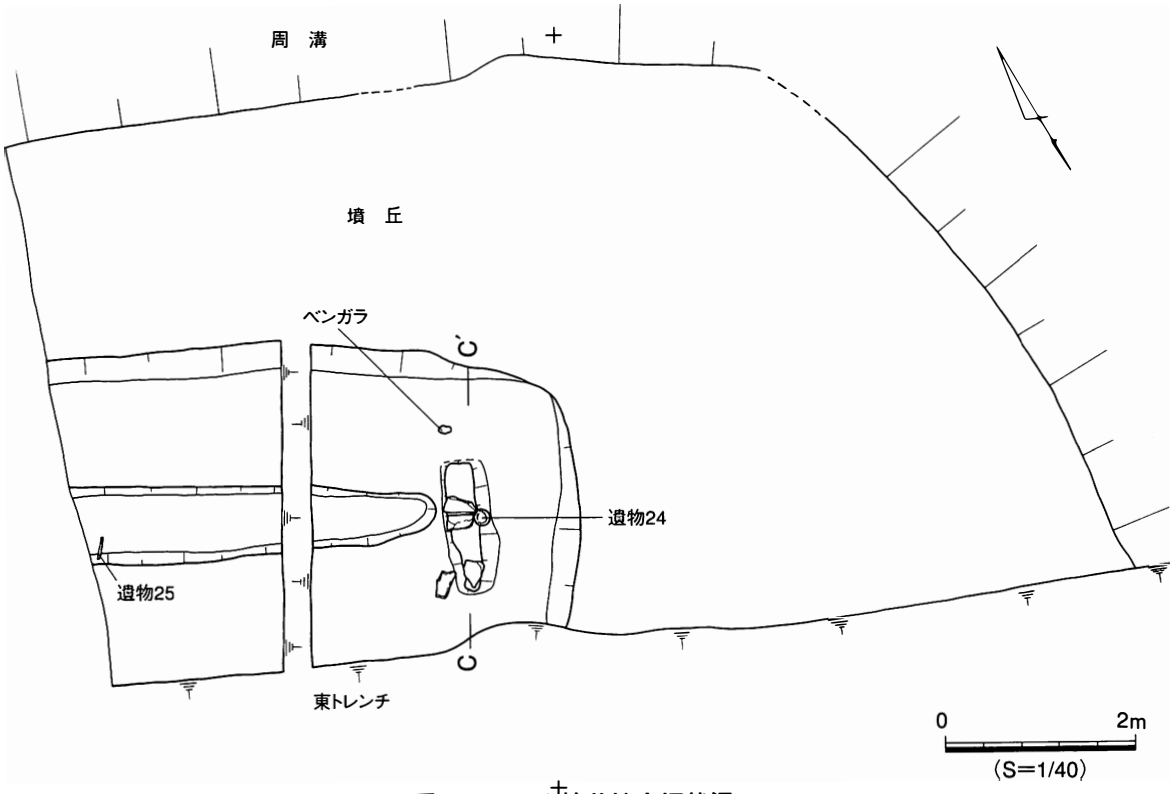


図19　11号古墳墓坑完掘状況

５　出土遺物

（１）遺物の出土状況（図22）

墓坑からは、原位置を保っていると思われる位置で須恵器提瓶と土師器壺が出土した。また、周溝の埋土の最下層から須恵器高坏や土師器甕が出土している。

（２）出土遺物点数

11号古墳からは、接合前の破片数で須恵器16点、土師器54点、金属製品１点、合計71点、接合後の破片数で須恵器14点、土師器14点、金属製品１点、合計29点が出土した。接合後の破片数の内訳は、須恵器が坏類10点、高坏３点、提瓶１点、土師器が甕13点、壺１点、金属製品は鉄鏃１点である。

（３）出土遺物の説明

21は須恵器提瓶である。ほぼ完形であり、棺外小口の粘土塊の上より出土した。背面、腹面、及び口頸部外面はカキメ調整がなされ、背面には放射状のヘラ描き文がわずかにみられる。肩部には一対の環状把手が付き、その表面はヘラ状工具で丁寧に面取りされている。口縁部は受け口状を呈し、端部は丸く仕上げられている。

22は須恵器高坏である。脚部外面に一条の低い突帯が巡り、端部は尖る。脚柱部の透しの底辺がわずかに確認できる。

23は須恵器坏蓋である。受部は鋭く外側に引き出され、その端部は尖る。

24は土師器壺である。完形であり、21と同じく棺外小口の粘土塊の上より出土した。底部外面には木葉痕が残り、体部内面下方には絞り込み痕が顕著に残る。

25は鉄鏃である。棺内の床面直上より出土した。鏃身部が欠落している。

26・27は須恵器高坏である。26は全体的に暗灰色～黒色を呈し、胎土中に白色粘土が筋状に入る。脚裾部には一条の突帯が巡る。27の胎土は26より砂質で、白色粘土はみられない。

28は須恵器坏蓋である。内面はすべて剥落しているが、受け部は鋭く、口縁部はわずかに外側に開く。胎土中に白色粘土が筋状に入る。

29は須恵器高坏蓋としたが、高坏の坏部の可能性もある。

30・31は土師器甕である。31は図22に示したように、脚部と体部の出土位置がやや離れているが、胎土や全体の器形から同一個体と判断した。脚部の器壁は厚く、端部は平坦面を有する。体部内面には細かいハケ調整、外面には粗いハケ調整がなされ、口縁端部はわずかに外側に突出する。なお、外面中程に煤が付着しているが、内面には煤がみられない。

32・33は須恵器坏蓋である。32はトレンチ掘削において出土し、33は11号古墳の墳丘上の表面採集資料である。32の受け部は鋭く、天井部外面上方は回転ヘラ削りが施されている。33は高坏の坏部の可能性もある。

34は須恵器坏身である。11号古墳の墳丘上の表面採集資料である。

須恵器の産地と時期は、23・28・32が猿投産で５世紀末～６世紀初頭、21・22・26・27・29・33が畿内系で６世紀末～７世紀初頭、34が美濃須衛産で８世紀中頃である。古墳の時期は２通りの解釈ができる。一つは５世紀末～６世紀初頭に木棺直葬墓が構築され、６世紀末～７世紀初頭に再利用したという考えで、もう一つは６世紀末～７世紀初頭に木棺直葬墓が構築され、それ以前の遺物は混入とする考えである。調査結果から、どちらが妥当か判断できなかった。

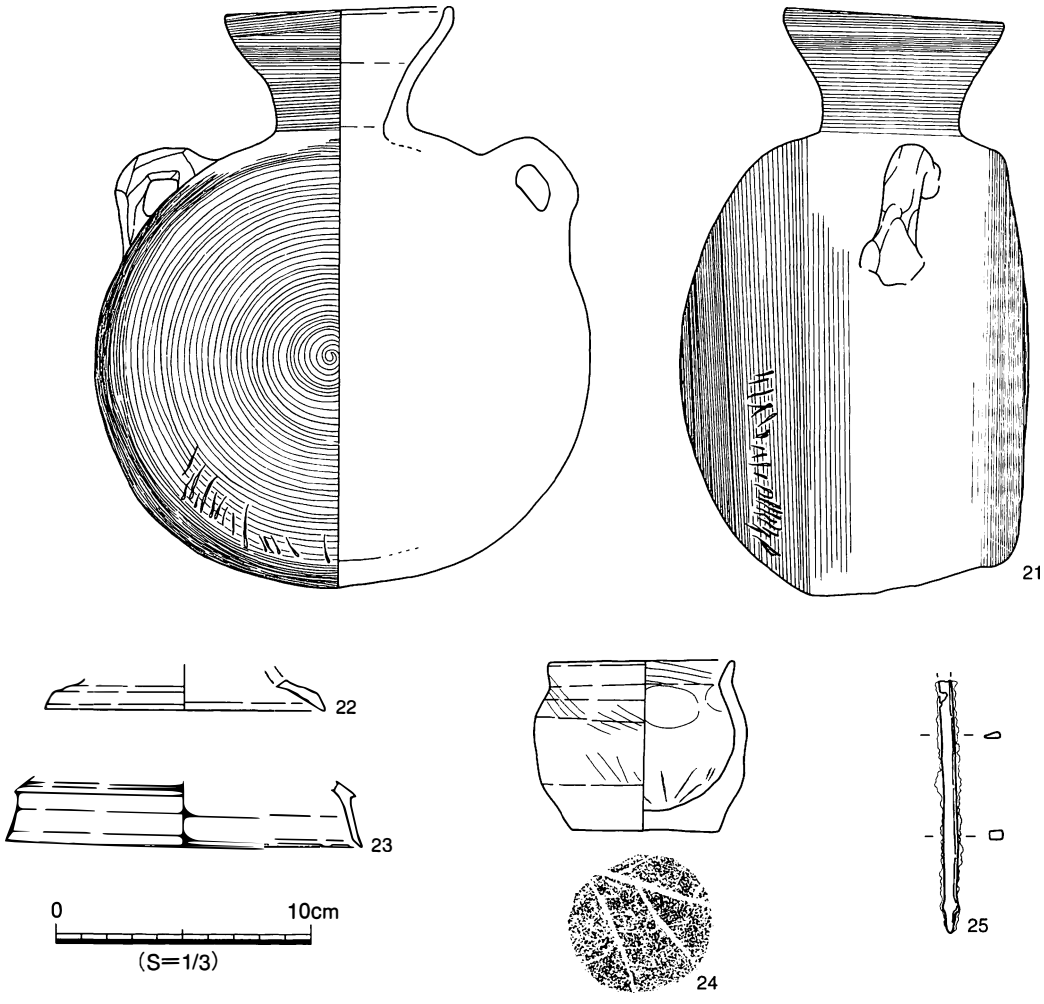


図20　11号古墳出土遺物実測図（１）

表３　11号古墳出土遺物観察表（１）

掲載番号	出土位置	グリッド	層位	遺物名	口径 底径 器高	調整	胎土	焼成	色調	口縁残存 X／12	備考	実測番号	挿図	図版
21	11号墓坑	7B	粘土塊	須恵器提瓶	8.8 － 23.2	背面と腹面、及び口頸部外面カキメ、口頸部内面回転ナデ	直径１～２㎜の白色粒をわずかに含む。砂質。	良好	灰色 (N4/0)	12.0	畿内系か猿投産。肩部に一対の環状把手。背面にヘラ描き文。外面に自然釉降灰。６c後半～７c初。	30	20	11
22	11号墓坑	7B	埋土	須恵器高坏	－ (11.0) －	脚部内外面回転ナデ	やや粗、径１～２㎜の白色、灰色粒をわずかに含む。	良好	灰白色 (7.5Y7/1)		畿内系。脚柱部に穿孔あり。６c末～７c初。	32	20	11
23	11号墓坑	7B	埋土	須恵器坏蓋	14.0 － －	口縁部内外面回転ナデ、天井部外面回転ヘラ削り	やや粗、径１㎜以下の白色粒をわずかに含む。白い粘土が筋状に入る。	良好	灰色 (N4/0)	1.2	猿投産。 ５c末～６c前。	33	20	11
24	11号墓坑	7B	粘土塊	土師器壺	7.2 5.2 6.7	底部外面木葉痕、体部外面斜めハケ、口縁部外面横ナデ、内面横ハケ、体部内面指圧痕	粗、径３㎜以下の白色、灰色、褐色粒をやや多く含む。繊維状の植物遺体もみられる。	良好	浅黄橙色 (10YR8/4)	12.0	体部内面下方に絞り込み痕あり。ほぼ完形。	34	20	11
25	11号墓坑	7B	埋土	鉄鏃	長さ9.9cm 幅　0.5cm 厚さ0.3cm						上部欠損	35	20	11

※法量の（　　）は推定値を示す

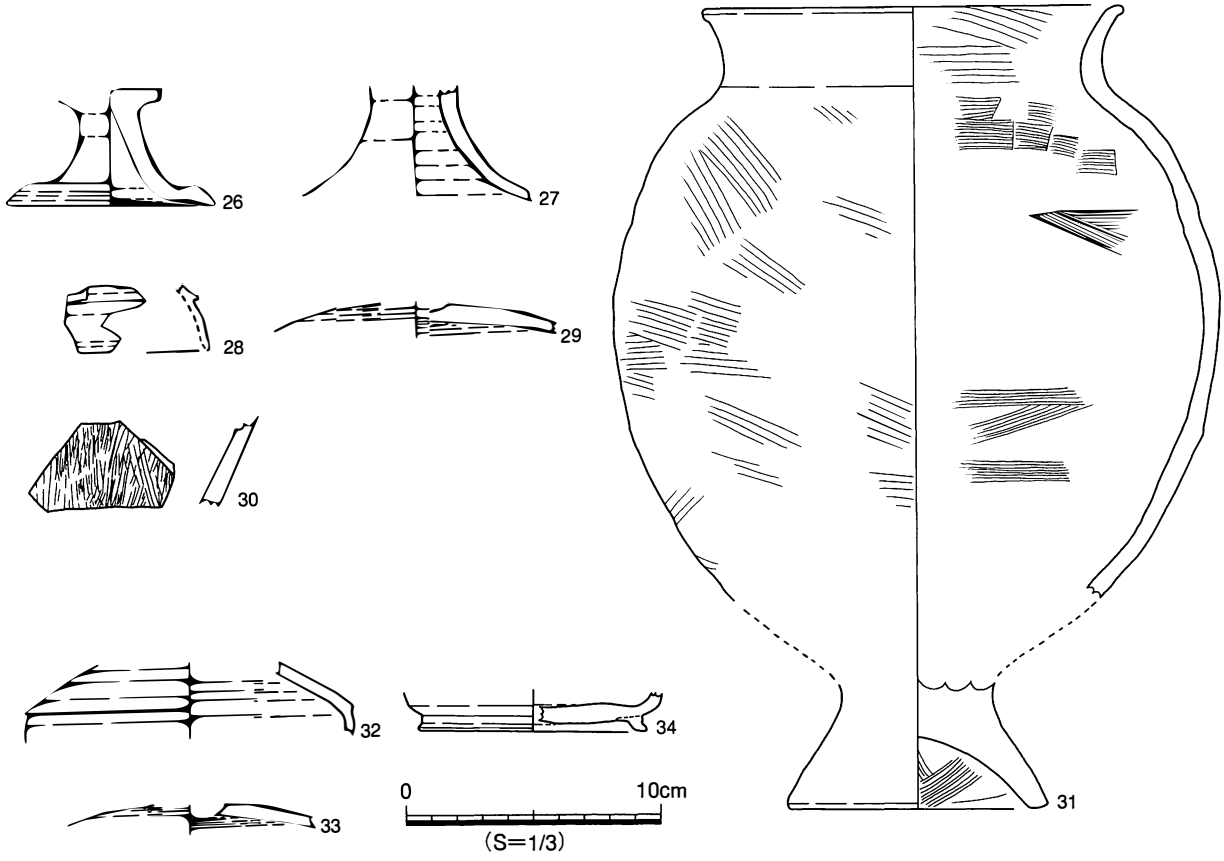


図21　11号古墳出土遺物実測図（２）

表４　11号古墳出土遺物観察表（２）

掲載番号	出土位置	グリッド	層位	遺物名	口径 底径 器高	調整	胎土	焼成	色調	口縁残存X/12	備考	実測番号	挿図	図版
26	11号周溝	6B	最下層	須恵器高坏	－ 8.2 －	脚部～坏部内外面回転ナデ	やや粗、径１㎜以下の白色粒をわずかに含む。白い粘土が筋状に入る。	良好	灰色(N3/1)		畿内系。外面に自然釉降灰。６c末～７c初。	36	21	11
27	11号周溝	6C	最下層	須恵器高坏	－ － －	脚部外面板ナデ、内面回転ナデ	やや粗、径１～２㎜の白色、灰色粒をわずかに含む。砂質。	良好	灰色(N4/1)		畿内系。脚部３穿孔。６c末～７c初。	37	21	11
28	11号周溝	7B	上層	須恵器坏蓋	－ － －	口縁部～天井部外面回転ナデ	やや粗、径１㎜以下の白色粒をわずかに含む。白い粘土が筋状に入る。	不良	灰白色(N8/1)	0.3	猿投産。内面剥落。５c末～６c前。	39	21	11
29	11号周溝	6B	最下層	須恵器高坏蓋	－ － －	天井部外面回転ヘラ削り、内面回転ナデ	やや粗、径１㎜以下の白色粒をわずかに含む。	良好	黄灰色(2.5Y5/1)		畿内系。６c末～７c初。	38	21	11
30	11号周溝	7C	最下層	土師器甕	－ － －	体部外面縦ハケ、内面縦方向の削り	直径１～３㎜の白色、灰色、赤色粒を幾つか含む。	良好	浅黄橙色(10YR8/3)			20	21	11
31	11号周溝	7C	最下層	土師器く字甕	(16.4) 10.2 －	脚部内面・体部内外面・口縁部内面横～斜めハケ、脚部外面指圧痕、口縁部外面横ナデ	粗、径３㎜以下の白色、灰色、褐色粒を多く含む。	良好	灰白色(2.5Y8/2)	3.5	体部外面に煤付着。	40	21	11
32	11号	7B	北トレンチ	須恵器坏蓋	－ － －	天井部外面上方回転ヘラ削り、他は回転ナデ	やや粗、径１㎜以下の白色粒をわずかに含む。白い粘土が筋状に入る。	不良	灰黄色(2.5Y6/2)		猿投産。受部径13.0㎝。５c末～６c前。	51	21	11
33	11号	7C	表土	須恵器坏蓋	－ － －	天井部外面回転ヘラ削り、内面回転ナデ	やや粗、径１㎜以下の白色粒をわずかに含む。	良好	黄灰色(2.5Y5/1)		畿内系。６c末～７c初。	52	21	11
34	11号	7C	表土	須恵器坏身	－ (9.0) －	底部外面回転ヘラ削り、高台周辺～体部内外面回転ナデ、底部内面静止指ナデ	やや粗、径１㎜以下の白色、灰色粒をわずかに含む。	良好	灰色(N5/1)		美濃須衛産。８c中。	50	21	11

※法量の（　　）は推定値を示す

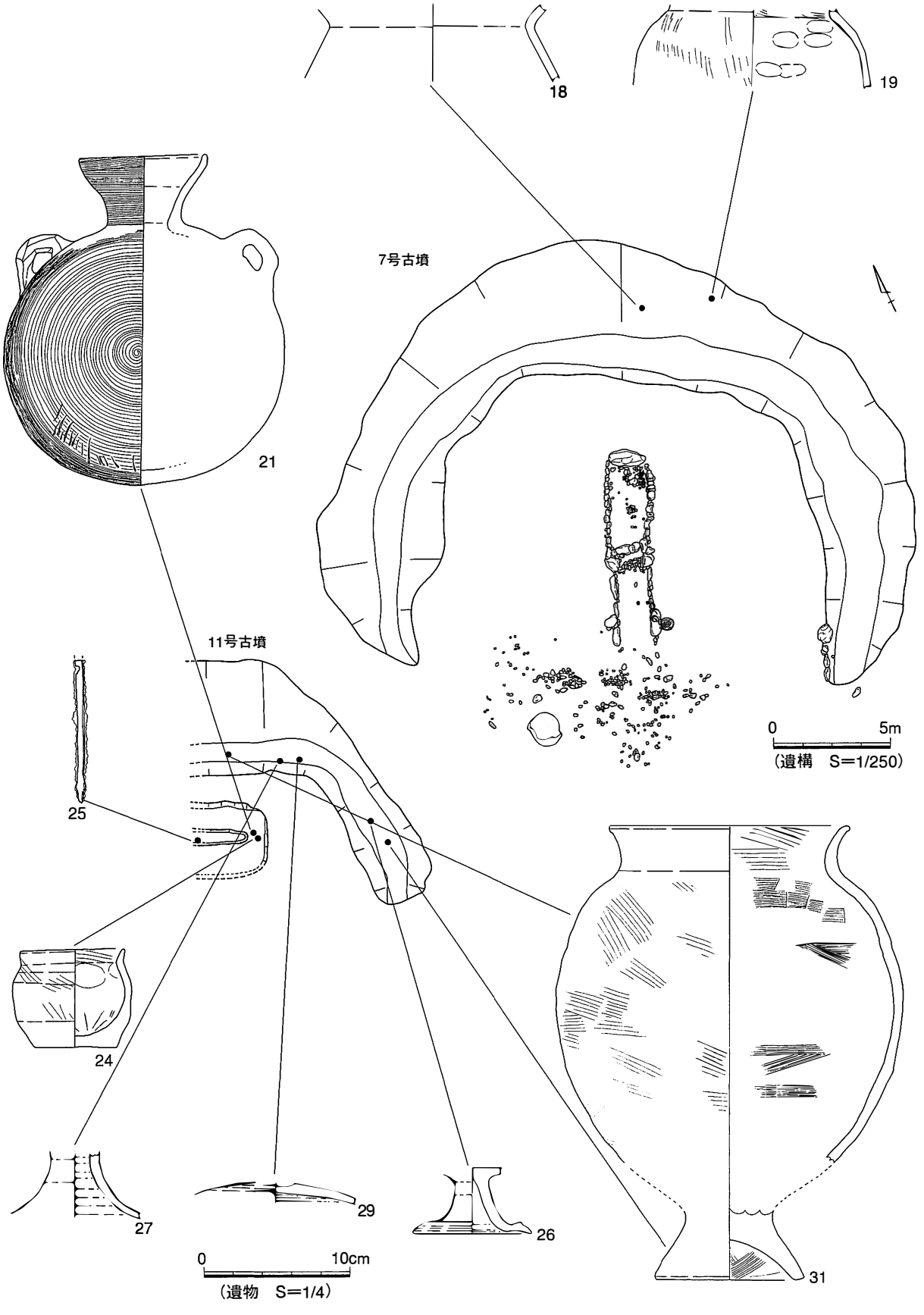


図22　11号古墳周溝・墓坑、７号古墳周溝遺物出土状況

第４章　自然科学分析

土師器・粘土塊・赤色顔料の分析

藤根　久（パレオ・ラボ）

１　はじめに

７号古墳からは、埋納した土師器や灰オリーブ色（7.5Y６/２）の粘土塊が検出された。また、隣接する床面からは、赤色顔料が塊状で検出された。

ここでは、土師器の材料、粘土の化学組成、赤色顔料の成分について検討した。

２　試料と方法

以下では、1．土師器の胎土材料、2．粘土塊の化学組成、3．赤色顔料の成分の各項目についてそれぞれ述べる。

［土師器の胎土材料］

試料は、７号古墳から出土した土師器片である。

この土師器は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片（プレパラート）を作成した。

⑴試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し平面を作成した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。

⑵さらに、研磨機及びガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドグラスに接着した。

⑶その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

土師器薄片は、薄片全面について微化石類(珪藻化石､骨針化石､胞子化石)や大型粒子などの特徴について観察･記載を行った｡なお､ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは表５の通りである。

［粘土塊の化学組成］

粘土塊は、恒温乾燥機内で80℃、24時間乾燥した。その後、電気炉を用いて750℃、３時間で焼成し、強熱減量試験を行った。

これら粉末は、乳鉢で粉末にした後、塩化ビニール製リングに充填して20ｔ加圧して成型した。

測定は、㈱パナリティカル社製波長分散型蛍光Ｘ線分析装置MagiX（PW2424型）を用いて検量線法による定量分析を行った。測定元素は主成分元素（Na_2O、MgO、Al_2O_3、SiO_2、P_2O_5、K^2O、CaO、TiO_2、MnO、Fe_2O_3）と微量元素（Rb、Sr）である。

［赤色顔料の成分分析］

試料は、現地においてフィルムケースに取り上げられた赤色塊である（図24)。この試料は、シャーレ上に展開し、際立って赤い部分を選んでポイント分析した。

測定は、㈱堀場製作所製XGT－5000TypeⅡを用いた。仕様は、X線導管径100μm、電圧50KV、電流0.06mA、測定時間200secで行い、標準試料を用いないFP法（ファンダメンタルパラメー法）で半定量分析を行った。

3　結果および考察

[土師器の胎土材料]

ここでは、土師器薄片全面について、偏光顕微鏡を用いて粒子の観察と同定を行った。なお、ここで使用した粒子の分類群については、藤根・今村（2003）を参照されたい。以下に、顕微鏡観察による特徴記載を述べる。

土師器：60～300μmが多い（最大粒径1.3mm）。石英・長石類〉複合石英類（微細）〉ガラス質〉複合石英類、雲母類、単斜輝石、斜方輝石、角閃石類、ジルコン、雲母類、珪藻化石（湖沼浮遊生指標種群Melosira granulata、淡水種Eunotia biareofera、Pinnularia属、Eunotia属、Cocconeis placentula、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石（ヨシ属含む）

表5に、土師器の観察結果について、粘土の特徴、砂粒の特徴、鉱物の特徴としてまとめた。

当遺跡が立地する地域は、長良川と津保川が合流する西側地域であるが、周辺に形成された段丘堆積物中の砂層の砂粒組成は堆積岩類や流紋岩類あるいは深成岩類と推定される。土師器胎土中の砂粒組成は、堆積岩類主体でありその他深成岩類とテフラであり流紋岩類などが含まれていないことから、隣接地の組成とは直ちに言えない。

一方、淡水種珪藻化石が含まれていたが、これらは珪藻化石の特徴から湖沼あるいは沼沢地などで堆積した粘土であることが分かった。ここで見られる珪藻化石の種類や構成種は、琵琶湖周辺の堆積物では良く見られるが、こうした地域の可能性を考えてみる必要がある。

表5　土師器胎土の粘土及び砂粒の特徴

器種	粘土の特徴									砂粒の特徴								鉱物の特徴					その他の特徴
	分類	種類	放散虫化石	海水種珪藻化石	淡水種珪藻化石	不明種珪藻化石	骨針化石	胞子化石	植物珪酸体化石	分類	堆積岩類	深成岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	片岩類	テフラ	角閃石類	輝石類	ジルコン	ザクロ石類	雲母類	
土師器	○	淡水成	－	－	＋	＋	＋	＋	＋	Cb	＋＋	＋	－	－	－	－	＋	＋	＋	＋＋	(＋)	＋	細粒質

[粘土塊の化学組成]

表6に、各試料の強熱減量と蛍光X線分析による結果を示す。強熱減量（%）は、乾燥重量に対する強熱重量の百分率として示し、主に粘土中に含まれる有機物量および結合水量や結晶水量の目安である。この強熱減量値は、概ね一般的な粘土と大差ない値を示している。

試料は、肉眼観察においては砂粒分の少ない粘土であった。また、少量を水に溶いて顕微鏡で観察すると珪藻化石や植物珪酸体化石などの微化石類を含まない粘土であった。

分析の結果では、酸化アルミニウム（Al_2O_3）が約22.76%と高く、酸化ケイ素（SiO_2）が約63.74%と高い。

一般的に、粘土では酸化アルミニウムが高く、砂粒では酸化ケイ素が高い。たとえば、美濃須衛産の山茶碗では、酸化アルミニウムが約17～21%、酸化ケイ素が約71～78%である（藤根、2000）。こう

したことから、比較的粘土分の高い粘土であると言える。

なお、顕微鏡観察により珪藻化石や植物珪酸体化石などの微化石類を含まないことから、段丘堆積物の可能性が考えられる。当遺跡の北側、関市広見－池尻地内あるいは下有知地内の水田地では、低地的景観を呈するものの水田直下には青灰～灰色の厚い粘土層が堆積している。これら粘土層は、数万年前に堆積した段丘成の堆積物と推定されるが、現在瓦の粘土材料として採掘されている。

なお、これら山茶碗と比べて酸化マグネシウムや酸化鉄などが高い値を示している。

表６　粘土塊の化学組成

（化学組成）［主成分元素］Na_2O：酸化ナトリウム、MgO：酸化マグネシウム、Al_2O_3：酸化アルミニウム、SiO_2：酸化ケイ素、P_2O_5：酸化リン、K_2O：酸化カリウム、CaO：酸化カルシウム、TiO_2：酸化チタン、MnO：酸化マンガン、Fe_2O_3：酸化鉄　［微量元素］Rb：ルビジウム、Sr：ストロンチウム、

No	強熱減量（750℃、3時間）			Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	主成分の合計	Rb	Sr
	強熱減量(g)	乾燥重量(g)	強熱重量(g)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)		(ppm)	(ppm)
粘土	4.03	3.76	6.70	0.18	1.78	22.76	63.74	0.040	3.39	0.01	1.13	0.020	4.23	97.28	293.88	72.56
誤　差				0.29	0.59	0.66	1.05	0.010	0.04	0.06	0.01	0.002	0.30		4.10	55.40

［赤色顔料の成分分析］

分析の結果、赤味の強い部分のポイント分析では、鉄（Fe）が約78.97％含まれていた。その他の元素では、イオウが約2.94％と比較的高い数値を示した。なお、他の赤色成分である水銀（Hg）などは含まれていなかった（図24）。

こうしたことから、この赤色顔料はベンガラである。

ベンガラは、古代のものは鉄に富んだ土、すなわち赤土の類を焼いて作られたものと考えられている（山崎（2002））。また、岡田（1997）は、縄文時代から古墳時代にかけて用いられたパイプ状ベンガラは、珪藻化石が見られたことから、崖端や湧水部や池中に沈殿した糸状体を形成する鉄細菌の生産物を焼成した結果得られたものと推定している。

引用文献

藤根　久・今村美智子（2003）第６節　住居跡・土坑墓出土土器の胎土材料.「深橋前遺跡（第２分冊）」、財団法人岐阜県文化財保護センター、p.34－51.

藤根　久（2000）第３節　山茶碗の蛍光Ｘ線分析.「船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡（第２分冊）」、財団法人岐阜県文化財保護センター、p.12－15.

岡田文男（1997）パイプ状ベンガラ粒子の復元. 日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集、p.38－39

山崎一雄（2002）古文化財の科学. 思文閣出版、p.352

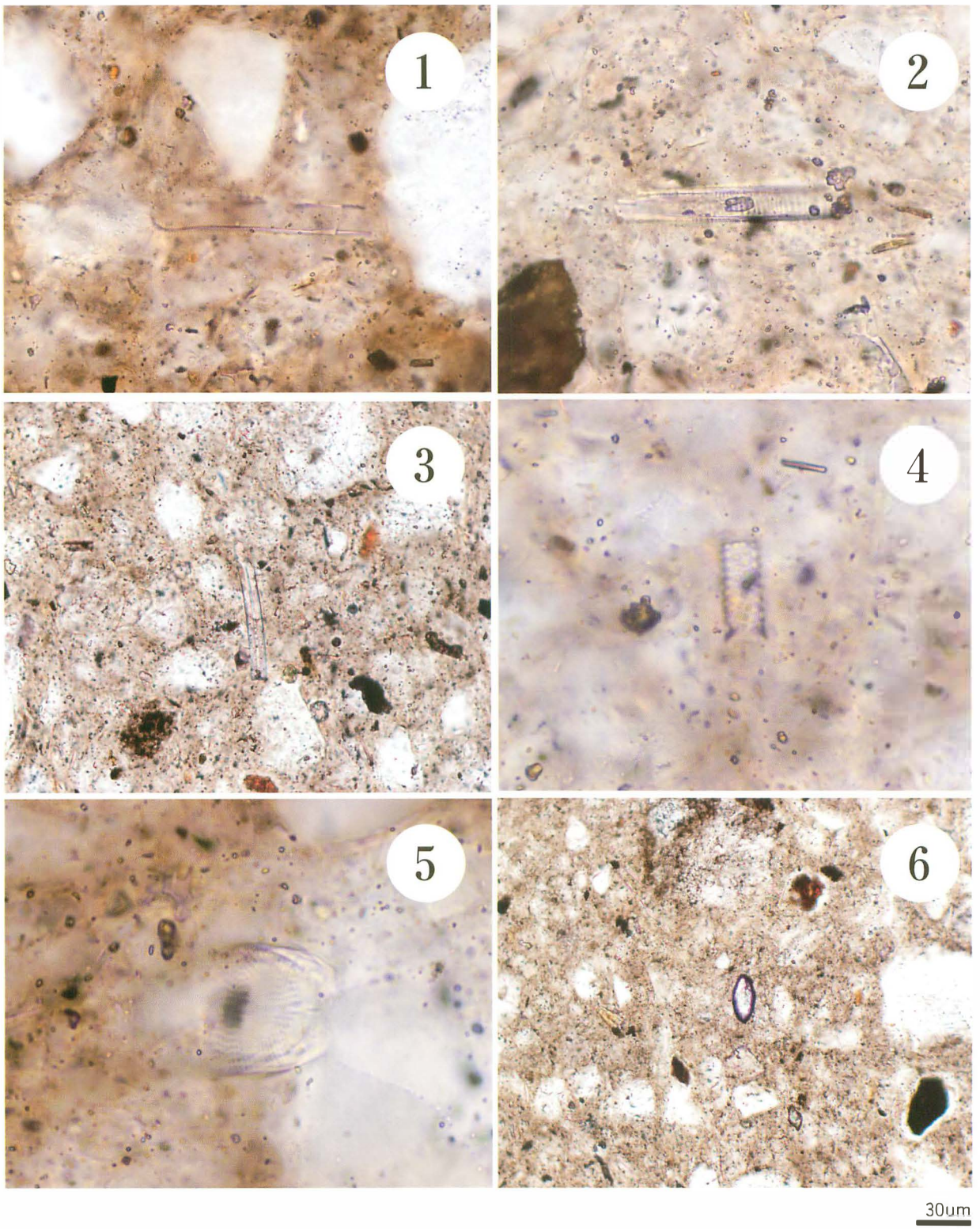


図23　土師器胎土中の粒子顕微鏡写真

1. 珪藻化石（Eunotia biareofera）
2. 珪藻化石（Eunotia属）
3. 骨針化石
4. 珪藻化石（Melosira granulata）
5. 珪藻化石（Cocconeis placentula）
6. ジルコン

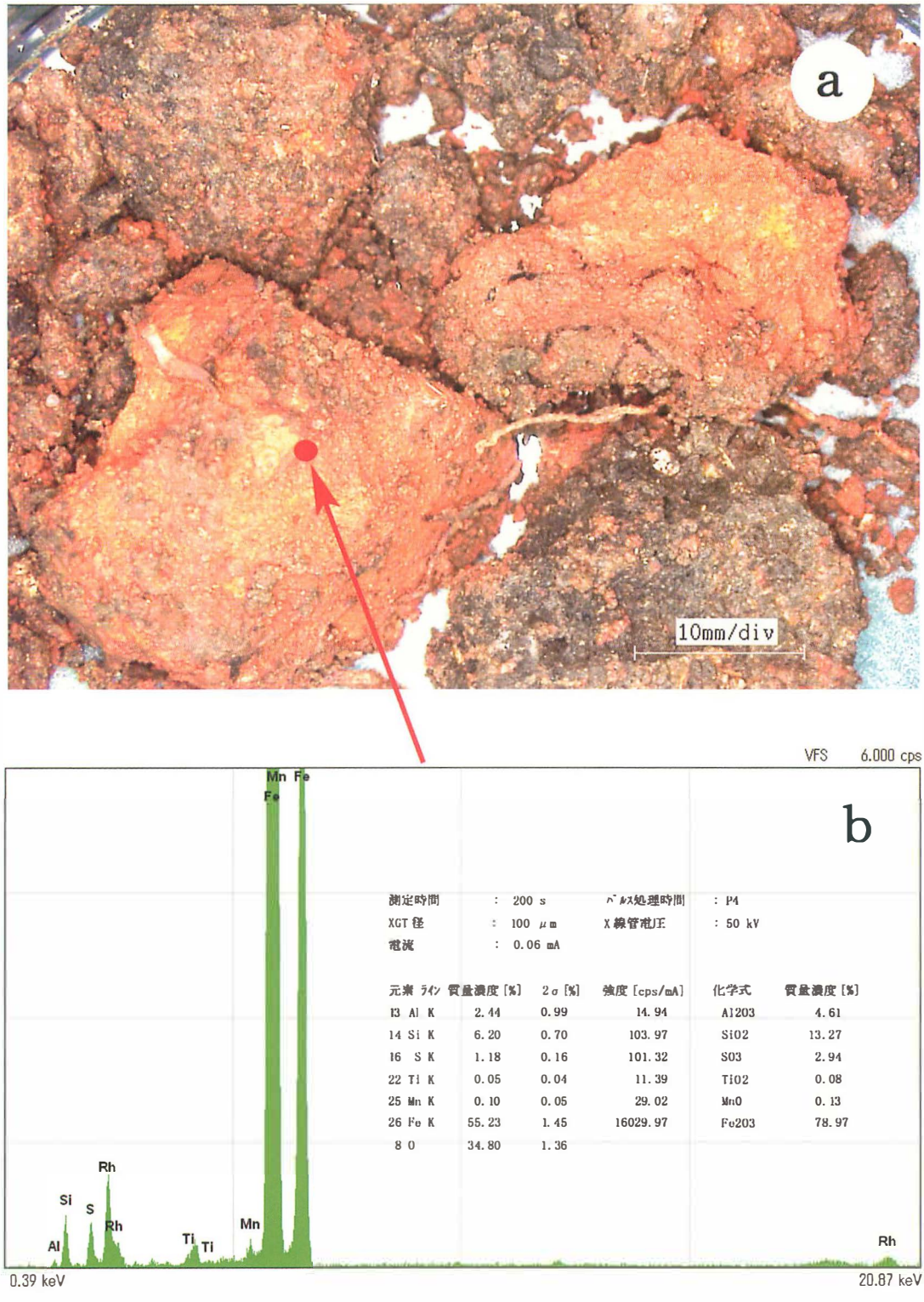


図24　赤色顔料塊とポイント分析結果

a：赤色顔料塊のマイクロスコープ写真

b：ポイント（矢印）分析のスペクトル図と分析結果

第５章　まとめ

第１節　調査区内の動向

今回の調査では、古墳時代以降の遺構と遺物を発見した（表７）。

古墳時代では５世紀末～７世紀初頭にかけて11号古墳が、７世紀中頃に７号古墳がそれぞれ構築される。11号古墳の構築時期の確定はできないが、出土遺物より５世紀末～６世紀初頭からこの地に人々の往来があったことがわかる。その後、江戸時代末まで人々は痕跡をほとんど残していないが、８世紀中頃の須恵器片が１点のみ出土している。江戸時代末には、残りの良い瀬戸美濃産の土瓶が７号古墳の墳丘上から出土した。古墳の墳丘を利用して中世墓や近世墓が造られる事例は、揖斐郡池田町願成寺西墳之越古墳群（横幕1999）、可児郡御嵩町金ヶ崎遺跡（岐阜県教育文化財団文化財保護センター2003）、可児市前山３・５号古墳（岐阜県教育文化財団文化財保護センター2003）など数多くが知られている。そのうち、近世墓が発見された金ヶ崎遺跡や前山３号古墳の出土遺物には、練鉢や土瓶などの大型の調理具が比較的多く使用されている傾向がある。当遺跡においても、調査区に接して小さな祠が存在していたため、江戸時代末～明治時代にかけては信仰の対象地となっていた可能性もある。

表７　調査区内の動向

西暦	時代		遺構	遺物	備考
	旧石器時代				
	縄文時代				
B.C.550	弥生時代				
A.D.250					
	古墳時代	前期			
		後期	11号古墳	須恵器 土師器 金属製品	古墳構築
		中期			
600	飛鳥時代		７号古墳		
	奈良時代			須恵器	
800					
1000	平安時代				
1200	鎌倉時代				
1400	室町時代				
	安土･桃山時代				
1600	江戸時代				
1800				近世陶器 金属製品 瓦	
	明治時代以降				神社･祠などに利用

※弥生時代の始まりの西暦は武末・石川2003に、
古墳時代の始まりの西暦は赤塚2003にそれぞれ従った。

第２節　古墳の時期と形態

今回の調査検出した３基の古墳の諸要素をまとめると表８のようになる。

７号古墳は成瀬氏による横穴式石室の分類（成瀬1985）によると、石室の平面型はⅢ型式、玄室の平面形はＢ類、羨道の平面形はｃ類となる。氏によると美濃地方において形式Ⅲ－Ｂ－ｃは７世紀初頭～７世紀末までみられるとされており、７号古墳の構築時期が７世紀中頃であるので、その時期の平面形として、当地方の一般的な形態を採用したといえる。また、７号古墳の石室の一特徴として、玄室内の側壁には川原石が、羨道部の側壁の下段には川原石、同上段には山石（チャート）が、それぞれ用いられていることが挙げられる。その類似例として関市塚原７号墳、富加町稲荷山古墳などがある。塚原７号墳は６世紀末～７世紀初頭の構築で、両袖式の横穴式石室を有する。玄室と羨道部は大半が川原石を用いているが、羨道部先端に２つの大きな山石を配置している。羨道部に川原石と山石を併用するという点で七反田番場山７号古墳と同じだが、山石を配置する場所が異なり、奥壁も山石と川原石の併用する点で異なる。稲荷山古墳は６世紀後半の構築で、無袖式の横穴式石室を有する。詳細は不明であるが、報告書の写真図版をみる限りでは、羨道部は下段に川原石、上段に山石を積んでいるようである（早川　他1970）。この３つの古墳は構築時期や規模が異なるため、安易に比較することは避けるべきであるが、長良川中流域でこのような古墳が分布している事実は看守すべきであろう。

10号古墳は同じく成瀬氏の横穴式石室の分類によると、石室の平面型と羨道の平面形は不明で、玄室の平面形はＢ類となる。この古墳は７号古墳に比べて石室が小規模であり、出土遺物がないことから築造時期は不明である。このような小石室はその出現期から古墳時代終末期に至るまで、規模の大きな石室と併存し続け、美濃地方では遅くとも７世紀中頃には出現しているとされている（横幕2004）。

11号古墳は５世紀末～６世紀初頭に構築され、６世紀末～７世紀初頭に再利用したという考えと、６世紀末～７世紀初頭に構築されたという考えの２通りがある。美濃地方における古墳時代中期末～後期初頭の主体部が木棺直葬である古墳は、美濃南西端に位置する海津地域の東天神古墳群、同東端に位置する恵那地域の森山古墳群などの７古墳40基、同中央部に位置する各務地域の熊田山北古墳群などが知られており（成瀬2002）、同北端に位置する郡上市白鳥町の西ヶ洞古墳群（岐阜県文化財保護センター 1995）を加えても、その数は極めて少ないことがわかる。仮に11号古墳の時期を５世紀末～６世紀初頭とすると、上記のどの地域にも属さない地域で新たに確認されたことになり、その意義は大きい。しかし、発掘調査では６世紀末～７世紀初頭の再利用の痕跡を確認できていないことも留意すべきである。また、６世紀末～７世紀初頭に構築されたとすると、これまで美濃地方で確認されている木棺直葬墓の最終年代より100年弱の隔たりを経ることになる。このような類例がこれまで美濃地方ではないことや、調査では墓坑と周溝より５世紀末～６世紀初頭の遺物が出土していることなどから、11号古墳の構築時期を６世紀末～７世紀初頭と断定できない。このように11号古墳の構築時期については慎重にならざるを得ず、今後の検討に委ねることにする。

表８　古墳の諸要素

	７号古墳	10号古墳	11号古墳
墳形	円墳	不明	円墳か
規模	直径約13.8m	不明	不明
外部施設	外護列石・周溝あり	確認できなかった	周溝あり
主体部	横穴式石室・両袖式	横穴式石室	木棺直葬
主体部長	約3.2m	残存長約1.8m	残存長約1.8m
主体部幅	約1.2m	約0.6m	約0.4m
副葬品等	須恵器・土師器	なし	須恵器・土師器・鉄鏃
築造時期	７世紀中頃	不明	５世紀末～６世紀初頭or ６世紀末～７世紀初頭

第３節　古墳の石室石材

七反田番場山古墳群のある番場山は、美濃帯堆積岩類のチャートの山であり、チャートの角礫が存在する。また、番場山の東を長良川が流れているため、上流の地質を反映して数種類の川原石（円礫）が存在する。

石室に使用されている石材としては、美濃帯堆積岩類であるチャート・砂岩、奥美濃酸性岩類、及び濃飛流紋岩類である溶結凝灰岩・花こう斑岩・石英斑岩・花こう岩、そして安山岩がある。これらの岩石は長良川の上流域に分布する主な岩石であり、番場山の東を流れる長良川から得ることができる。また、上記以外の岩石も長良川の礫として存在するが、分布範囲が限られており、少量である。石室に使用されている岩石は、近くのチャート（角礫）及び長良川の川原に見られる主な円礫からなり、遠方から運んだという可能性を考える必要はないだろう。

以下に、２基の古墳の石材について述べる。７号古墳に関しては、玄室内と羨道部の石材の特徴が異なっているため、それぞれ分けて説明する。古墳の側壁石には様々な大きさのものが使用されているが、平均径が約15㎝以下のものが大きな石と石の間に詰めてあり、詰めてある石とそうでない石を区別するため平均径が15㎝以上と未満に分けて石材の分類を行った（表９･図25）。７号古墳の両側の立柱石はいずれもチャートでできており、これら２個については玄室と羨道の表には入れていない。

［７号古墳玄室］：径15cm以上は、約50％が溶結凝灰岩で、花こう斑岩などが約25％を占め、砂岩、花こう岩、安山岩、チャートはいずれも10％以下である。径15cm以下の石は、多い順から溶結凝灰岩：約45％、砂岩：約20％、チャート：約15％である。

［７号古墳羨道］：径15cm以上は、約65％がチャートで、溶結凝灰岩と花こう斑岩などが合わせて約30％である。径15cm以下の石は、チャート、砂岩、溶結凝灰岩がほぼ同じで約30％ずつである。

［７号古墳（全体）］：径15cm以上は、約40％が溶結凝灰岩で、花こう斑岩などが約20％、チャートが約15％を占め、砂岩、花こう岩、安山岩はいずれも10％以下である。径15cm以下の石は、多い順から溶結凝灰岩：約40％、砂岩：約25％、チャート：約20％、安山岩：約10％である。

［10号古墳］：径15cm以上は、約50％が溶結凝灰岩で、花こう斑岩などが約20％を占める。径15cm以下の石は、チャート：約65％、砂岩：約25％、溶結凝灰岩：約10％であった。

２基の古墳の石材について、石材の個数が多くないため特徴については一概に言えないが、次の４点があげられる。

・７号古墳の玄室と羨道の石材の違いは明確で、玄室は90％以上が円礫であり、羨道は３分の２近くが角礫（チャート）である。

・７号古墳の下部の１、２段は玄室、羨道とも俵形の円礫を使用している。礫種からするとほとんどが花こう斑岩、溶結凝灰岩である。この２種類の岩石は、石材の性質上、柱状節理で割れることがあり、それが川の運搬により俵形の円礫になったものである。

・７号古墳玄室内と10号古墳における15cm以上の石材は、溶結凝灰岩と花こう斑岩が多く、両方で約70％を占める。

・７号古墳と10号古墳における15cm以上の石材は、それぞれの石材の量比について10％以上の違いは見られない。

表９　７・10号古墳の石材一覧

［径15cm以上］

	美濃帯堆積岩類		奥美濃酸性岩類、濃飛流紋岩類			安山岩
	チャート	砂岩	溶結凝灰岩	花こう斑岩、石英斑岩	花こう岩	
７号古墳玄室	3	6	49	24	10	7
７号古墳羨道	13	1	2	4	0	0
７号古墳	18	7	51	28	10	7
10号古墳	4	4	15	6	0	1

［径15cm未満］

	美濃帯堆積岩類		奥美濃酸性岩類、濃飛流紋岩類			安山岩
	チャート	砂岩	溶結凝灰岩	花こう斑岩、石英斑岩	花こう岩	
７号古墳玄室	11	15	30	1	0	8
７号古墳羨道	13	13	13	1	0	1
７号古墳	24	28	43	2	0	9
10号古墳	20	8	4	0	0	0

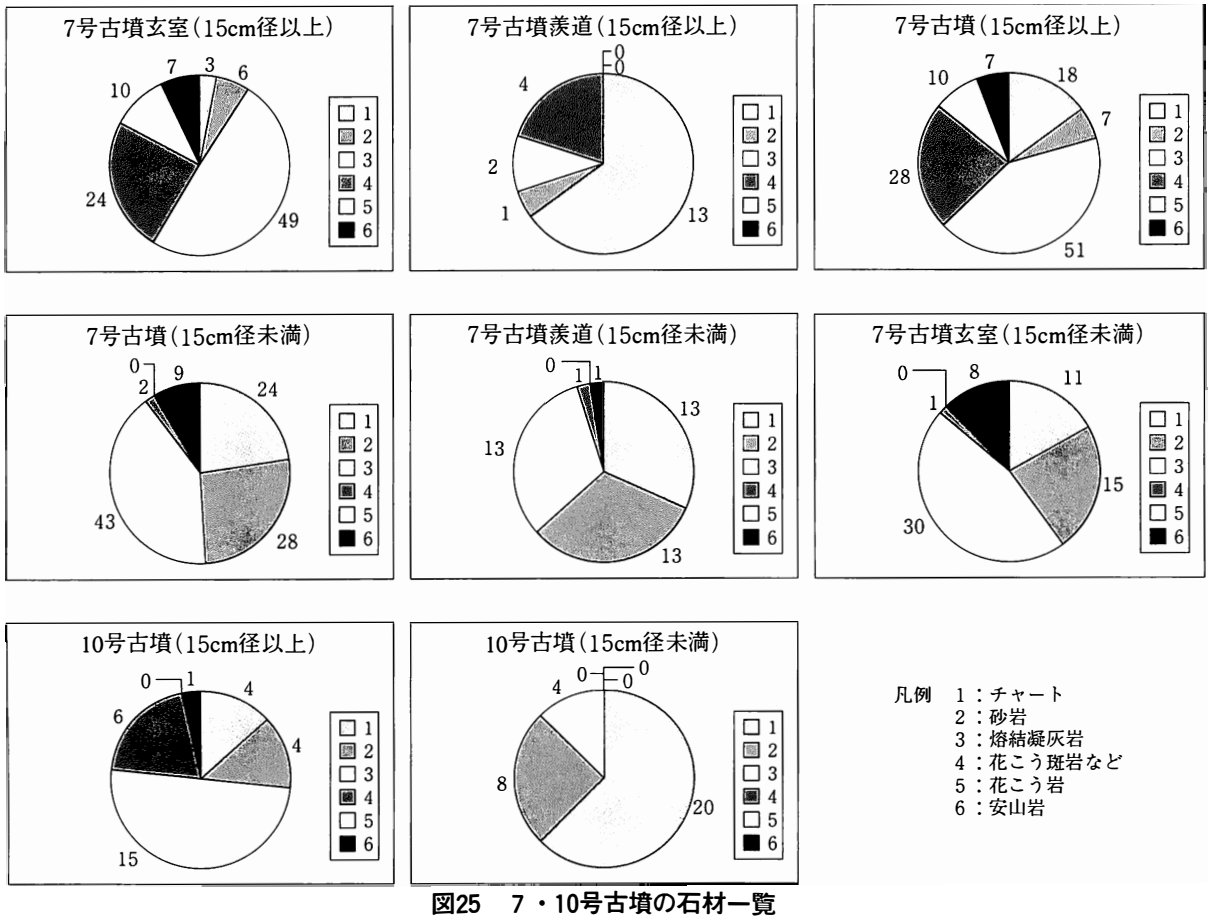
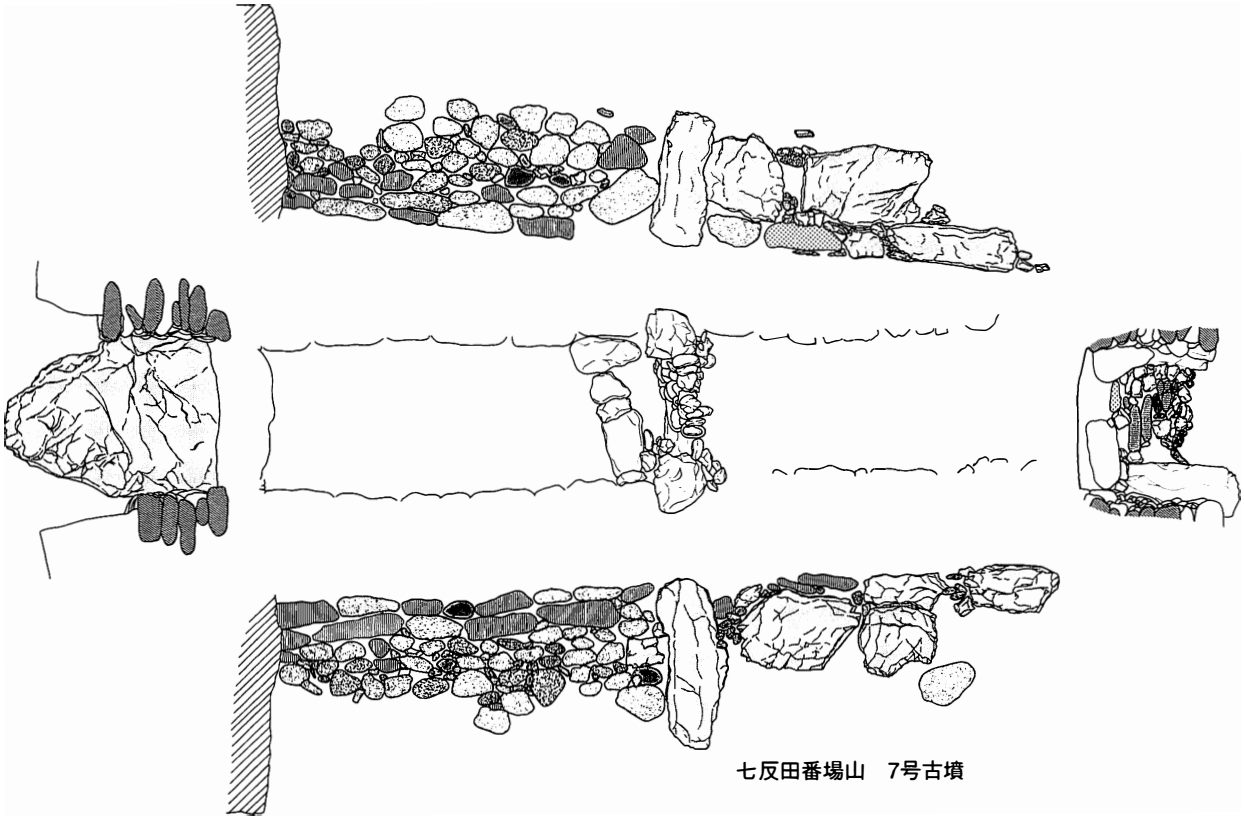


図25　７・10号古墳の石材一覧



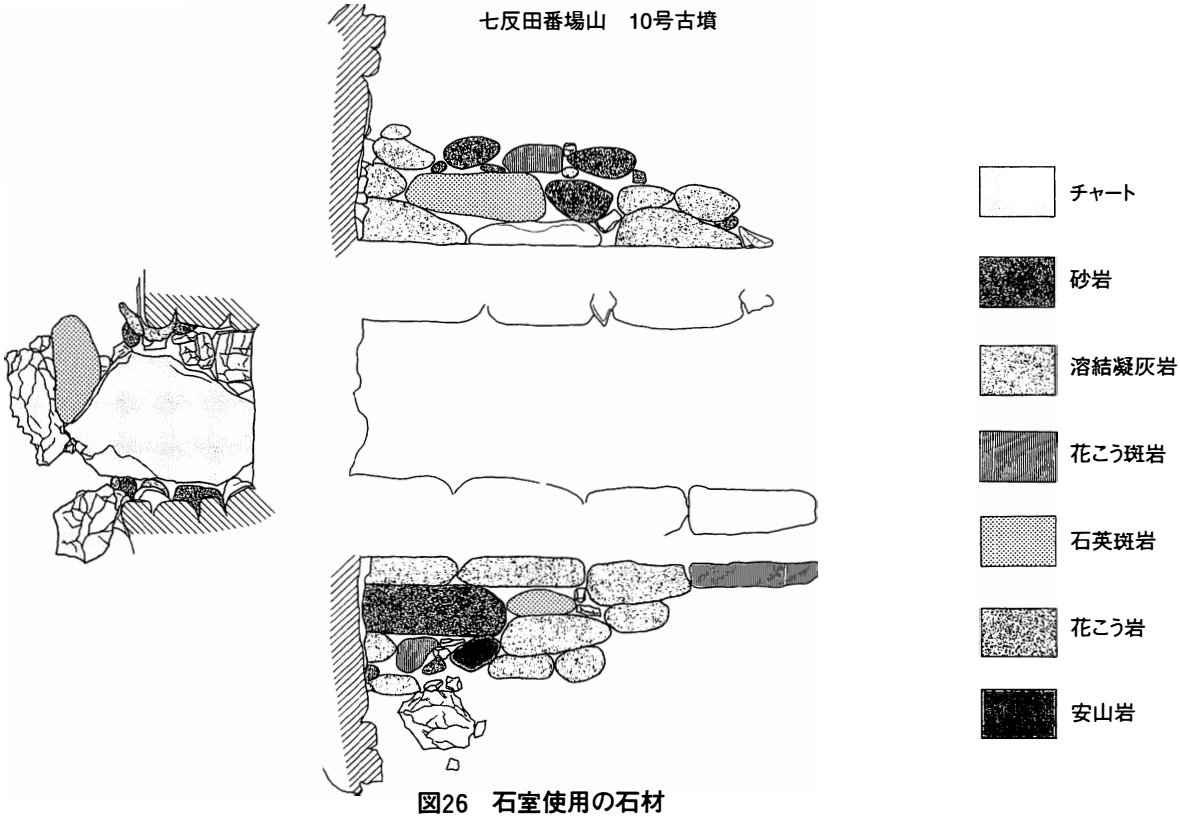


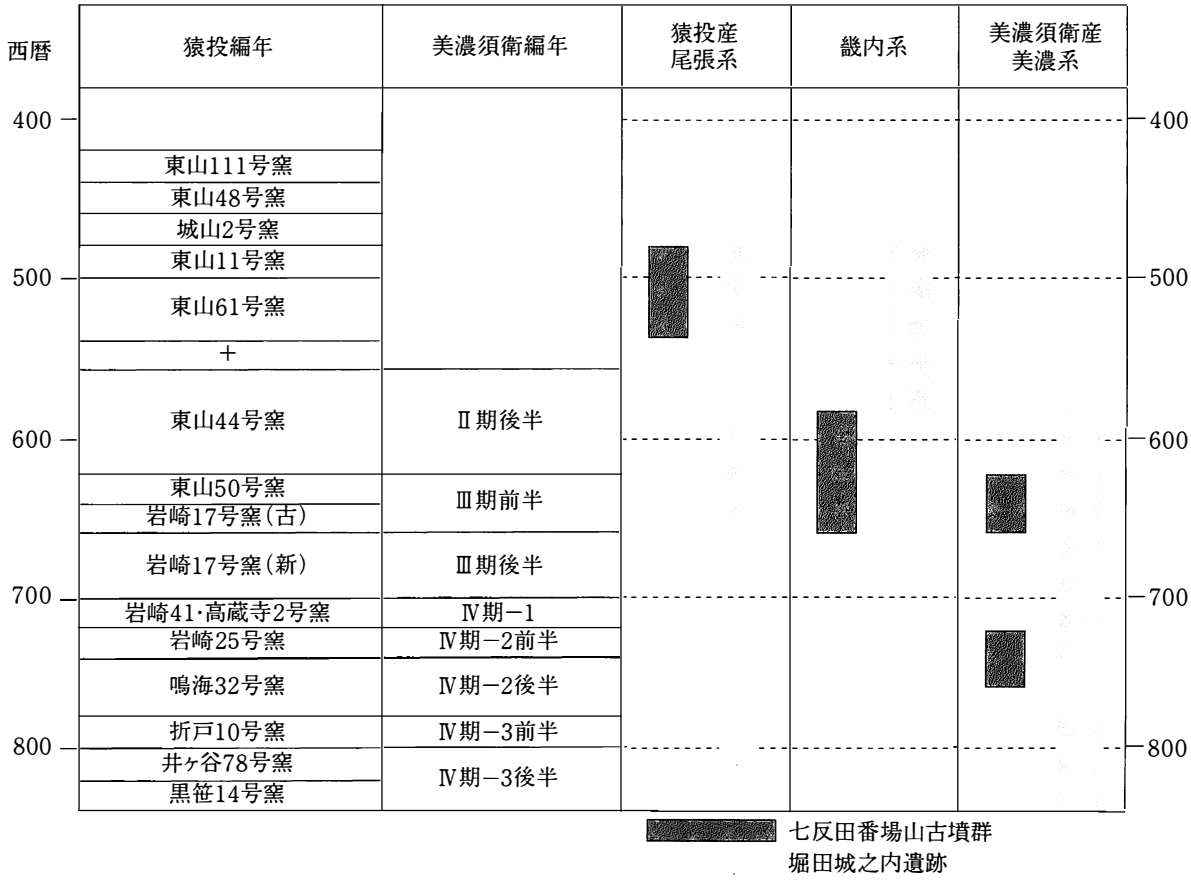
図26　石室使用の石材

第4節　須恵器の産地比較

ここでは今回の調査で最も出土量の多い須恵器の産地に着目する。出土した須恵器は猿投産（尾張系）、美濃で焼成された畿内系、美濃須衛産（美濃系）の3種類の胎土に分類できる（渡邉1996）。胎土毎の時期をまとめると、猿投産（尾張系）が5世紀末～6世紀前半、美濃産（畿内系）が6世紀末～7世紀初頭、美濃須衛産（美濃系）が7世紀中頃と8世紀中頃となる。このような時期による産地の選択が、当遺跡周辺で普遍的な現象であるのかを知るために、当遺跡と同じく岐阜市の長良川右岸に位置する堀田城之内遺跡の須恵器を検討する（岐阜市遺跡調査会1996、岐阜県文化財保護センター1997）。堀田城之内遺跡は、当遺跡から約4.5km下流にある縄文時代から近世まで続く集落遺跡であり、古墳時代の須恵器が多量に出土している。その須恵器は、猿投産が5世紀末～6世紀前半、6世紀末～7世紀中頃、8世紀後半～9世紀前半、畿内系が5世紀末～6世紀後半、美濃須衛産が6世紀末～9世紀代までである（表10）。つまり、七反田番場山古墳群で使用されている須恵器の産地のうち、猿投産（尾張系）と美濃須衛産（美濃系）は同時期に堀田城之内遺跡でも使用されていたといえるが、畿内系須恵器は七反田番場山古墳群と堀田城之内遺跡で使用する時期が全く異なっていたといえる。

比較の対象とした遺跡の性格が古墳と集落遺跡であることや、今回の調査では古墳2基からしか遺物が出土しなかったため、このような差が本当に存在するのか慎重に判断せねばいけないが、今後同様の分析を重ねれば明らかとなっていくと思われる。

表10　須恵器の時期と産地の比較



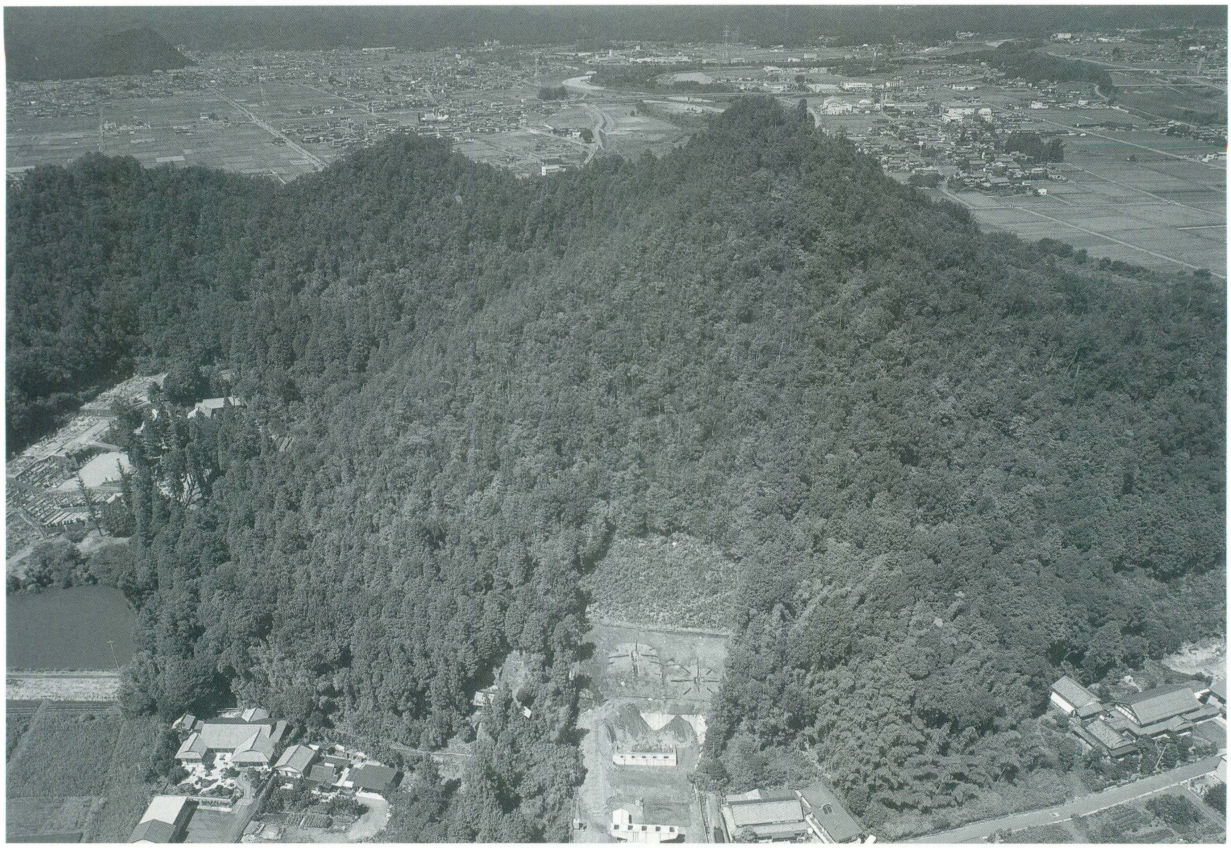
引用・参考文献

赤塚次郎　2003「中部・近畿地方の弥生・古墳時代編年の現状と課題」
『第５回考古科学シンポジウム発表要旨』名古屋大学年代測定総合研究センター
（財）岐阜県文化財保護センター　1997『堀田城之内遺跡』
（財）岐阜県文化財保護センター　1995『西ヶ洞遺跡・西ヶ洞古墳群』
（財）岐阜県教育文化財団文化財保護センター　2003『金ヶ崎遺跡・青木横穴墓』
（財）岐阜県教育文化財団文化財保護センター　2003『杉ヶ洞３・５号古墳　前山２号古墳』
岐阜市　1979『岐阜市史　史料編　考古・文化財』
岐阜市　1980『岐阜市史　通史編　原始・古代・中世』
岐阜市遺跡調査会　1996『堀田・城之内』
齊藤孝正　1995「Ⅰ東海西部（愛知・岐阜）」『須恵器集成図録　第３巻　東日本編Ⅰ』雄山閣出版
武末純一・石川日出志　2003「弥生時代早期から中期の編年表」
『考古資料大観１　弥生・古墳時代　土器１』小学館
長瀬治義　1994「第３項　濃尾の川原石積石室」『川合遺跡群』可児市教育委員会
成瀬正勝　1985「横穴式石室の型式と変遷について－特に美濃地方の場合－」『岐阜史学』第79号
成瀬正勝　2002「美濃の中期古墳」『古墳時代中期の大形墳と小型墳』第10回東海考古学フォーラム
早川正一　他　1970『富加町の古墳』富加町教育委員会
横幕大祐　1999『願成寺西墳之越古墳群資料調査報告書』池田町教育委員会
横幕大祐　2001「美濃地方における後期古墳の状況」『東海の後期古墳を考える』
第８回東海考古学フォーラム
横幕大祐　2004「美濃における古墳終末に関する覚書」『かにかくに　八賀晋先生古稀記念論文集』
渡辺博人　1996「美濃の後期古墳出土須恵器の様相―蓋坏の型式設定とその編年試案―」
『美濃の考古学』創刊号

写　真　図　版

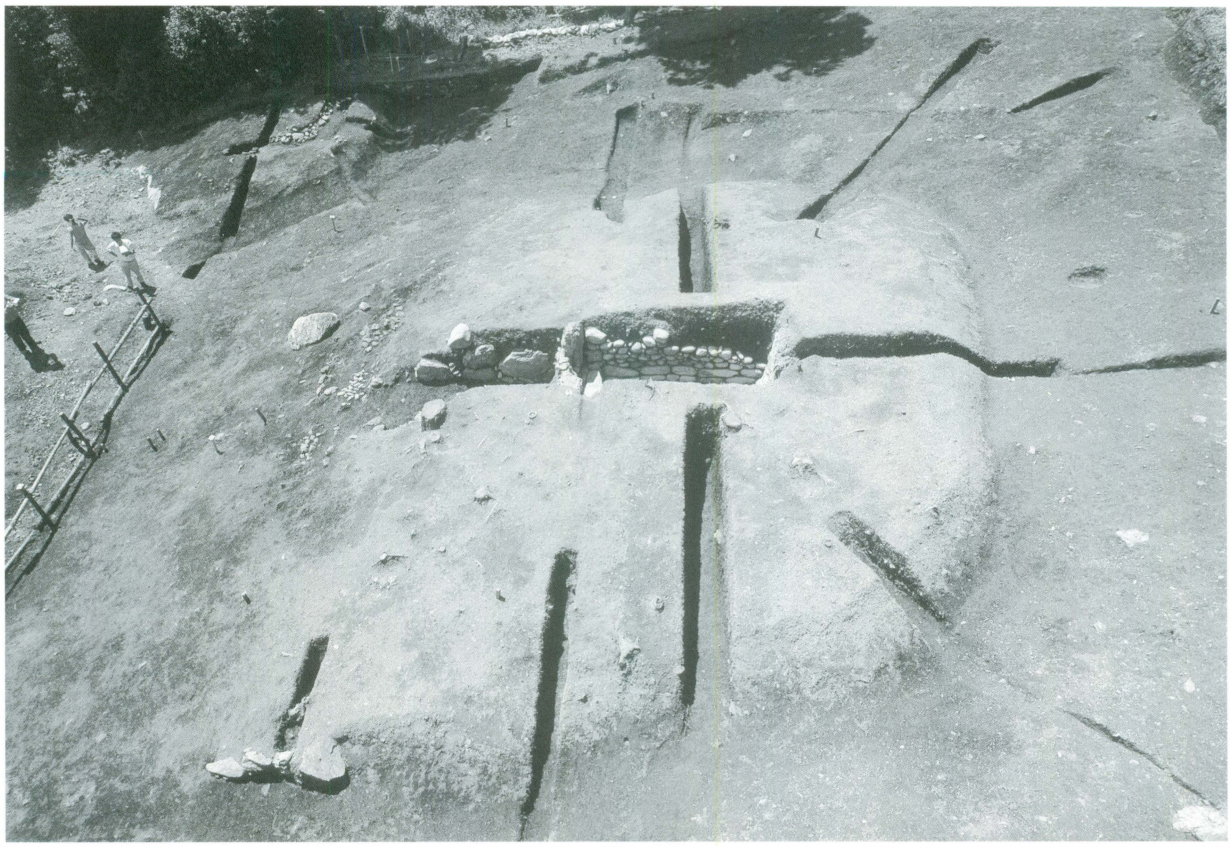
調査区遠景（南西から）

図版２　調査区遠景・近景

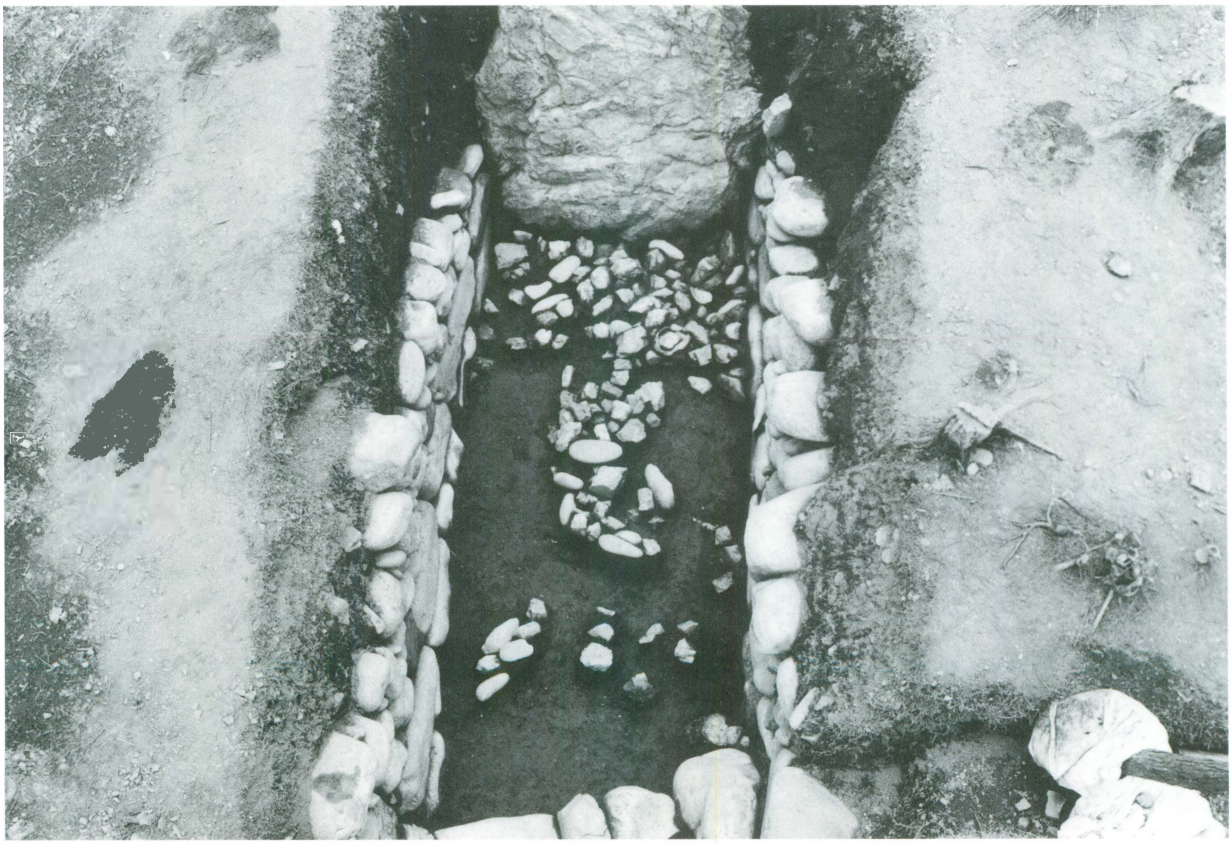


調査区遠景（南から）

調査区近景（北から）



7号古墳近景（東から）



7号古墳床面検出状況（南から）

図版４　７号古墳（２）

７号古墳石室側壁石検出状況（北西から）

７号古墳石室側壁石検出状況（北東から）

7号古墳閉塞石検出状況（北西から）

7号古墳閉塞石検出状況（北から）

7号古墳閉塞石検出状況（南から）

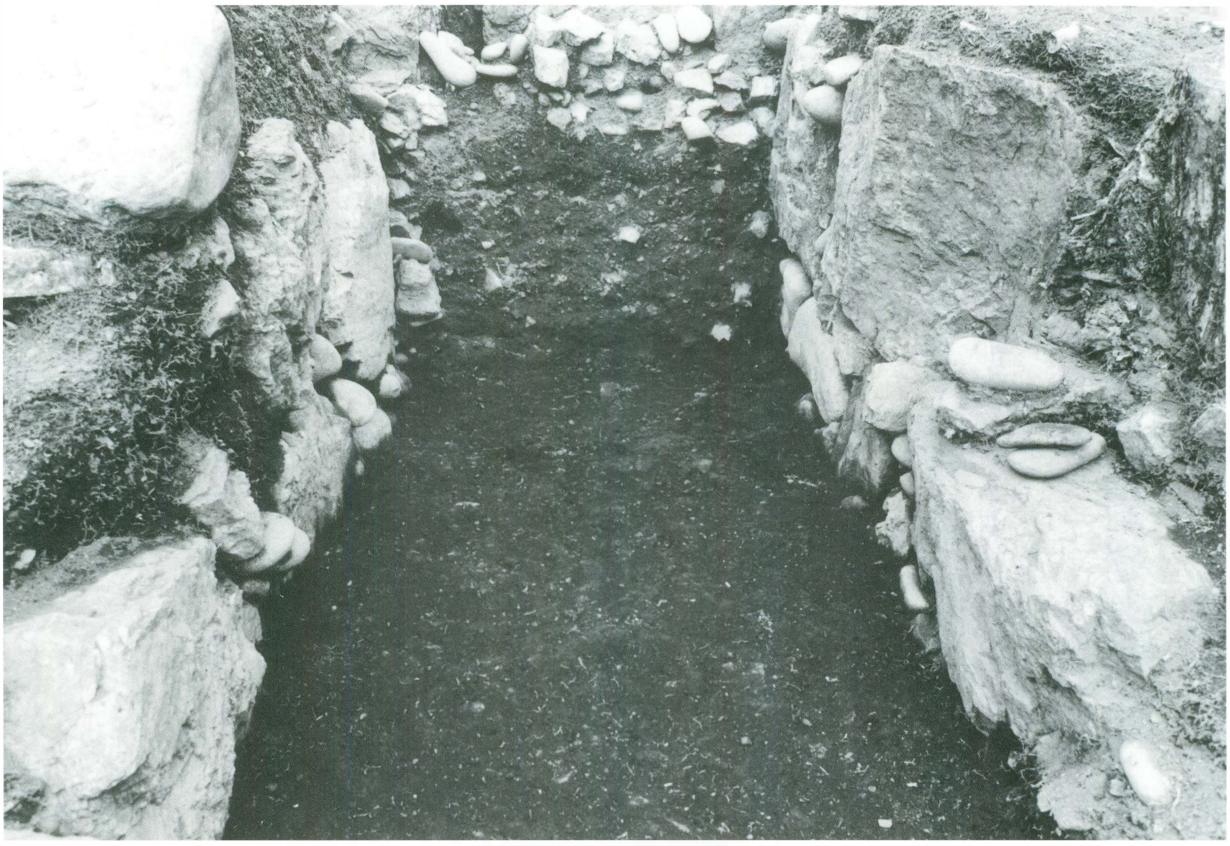
7号古墳閉塞石検出状況（東から）

7号古墳床面検出状況（北から）

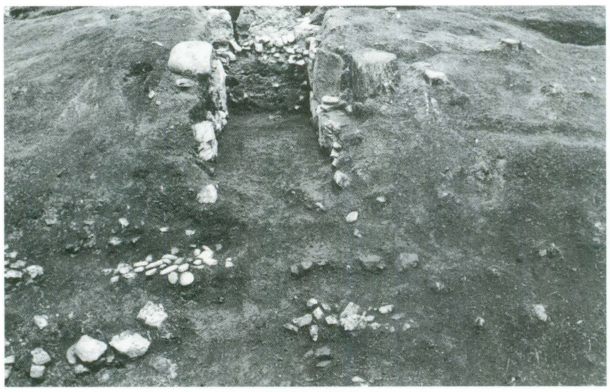
図版６　７号古墳（４）

７号古墳羨道部側壁石検出状況（東から）

７号古墳羨道部側壁石検出状況（西から）

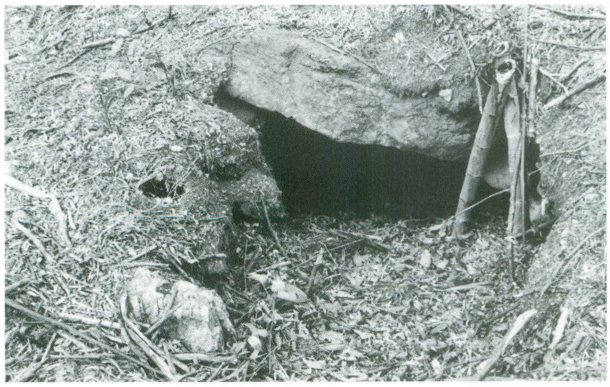


7号古墳羨道部完掘状況（南から）

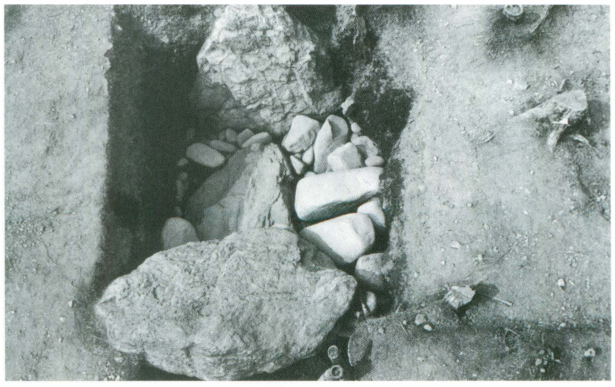


7号古墳前庭部検出状況（南から）

7号古墳遺物出土状況（南から）



7号古墳調査前風景（南から）

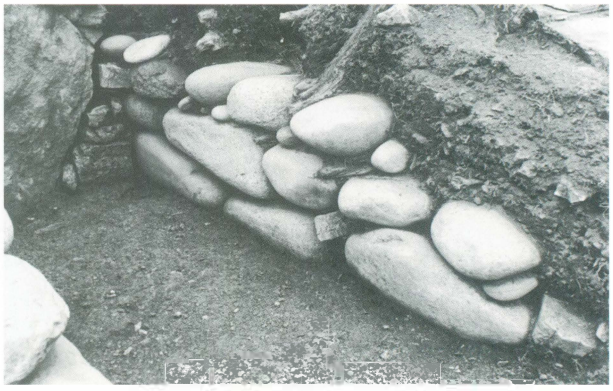


7号古墳天井石検出状況（南から）

図版８　10号古墳

10号古墳石室完掘状況（南から）

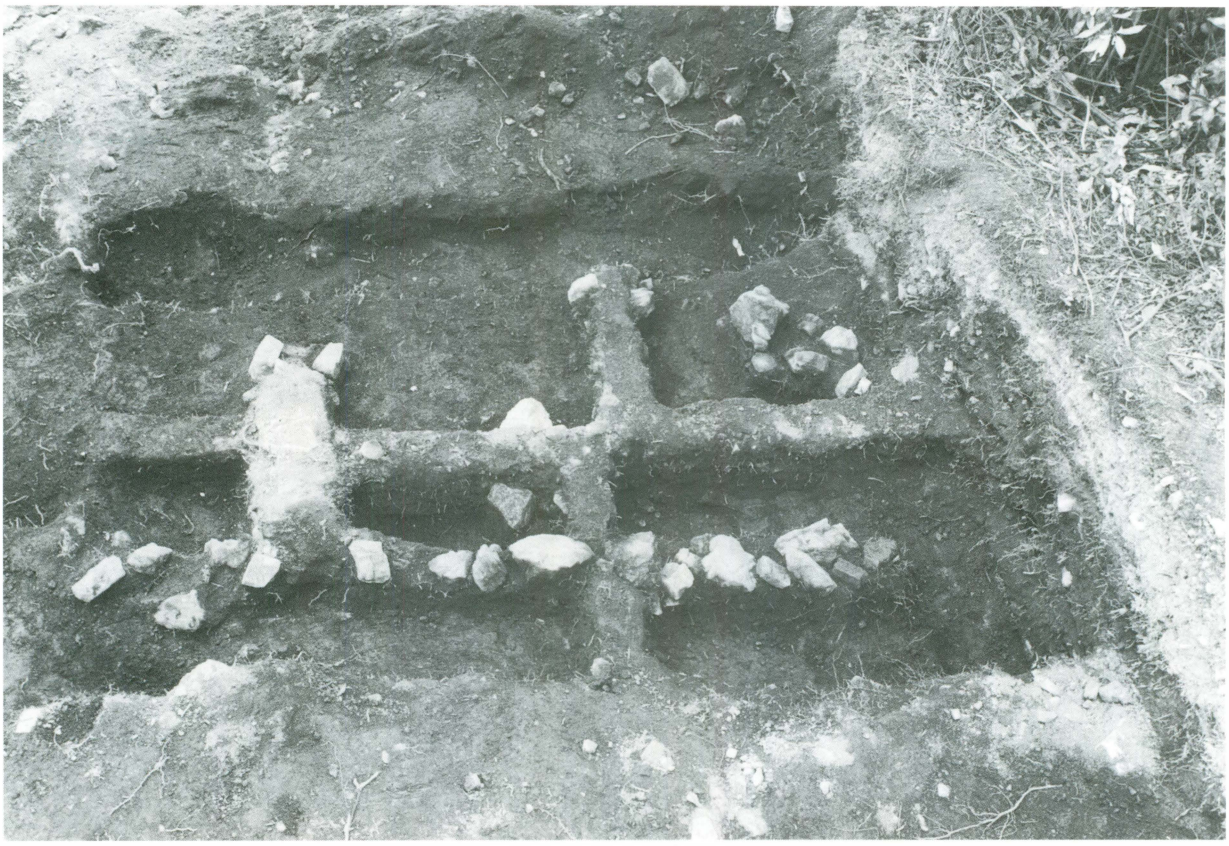
10号古墳石室側壁石検出状況（南東から）



10号古墳石室側壁石検出状況（南西から）

10号古墳石室検出状況（南から）

10号古墳石室完掘状況（北から）



11号古墳墓坑検出状況（北から）

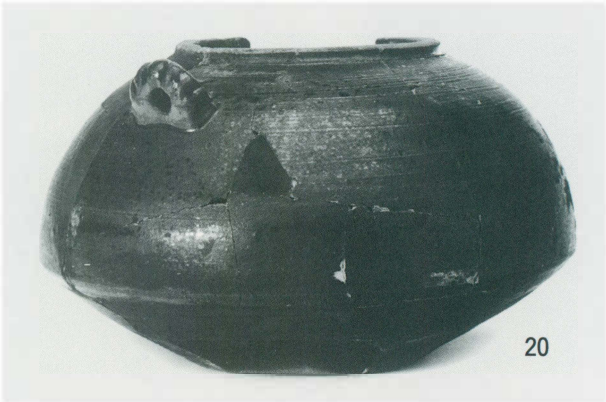
11号古墳盛土検出状況（南から）

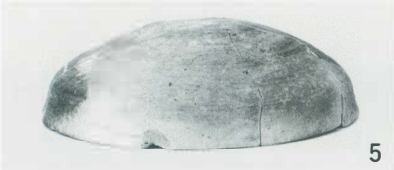
11号古墳遺物出土状況（南から）

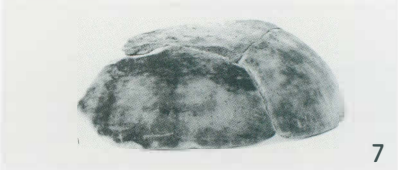
調査前風景（南から）

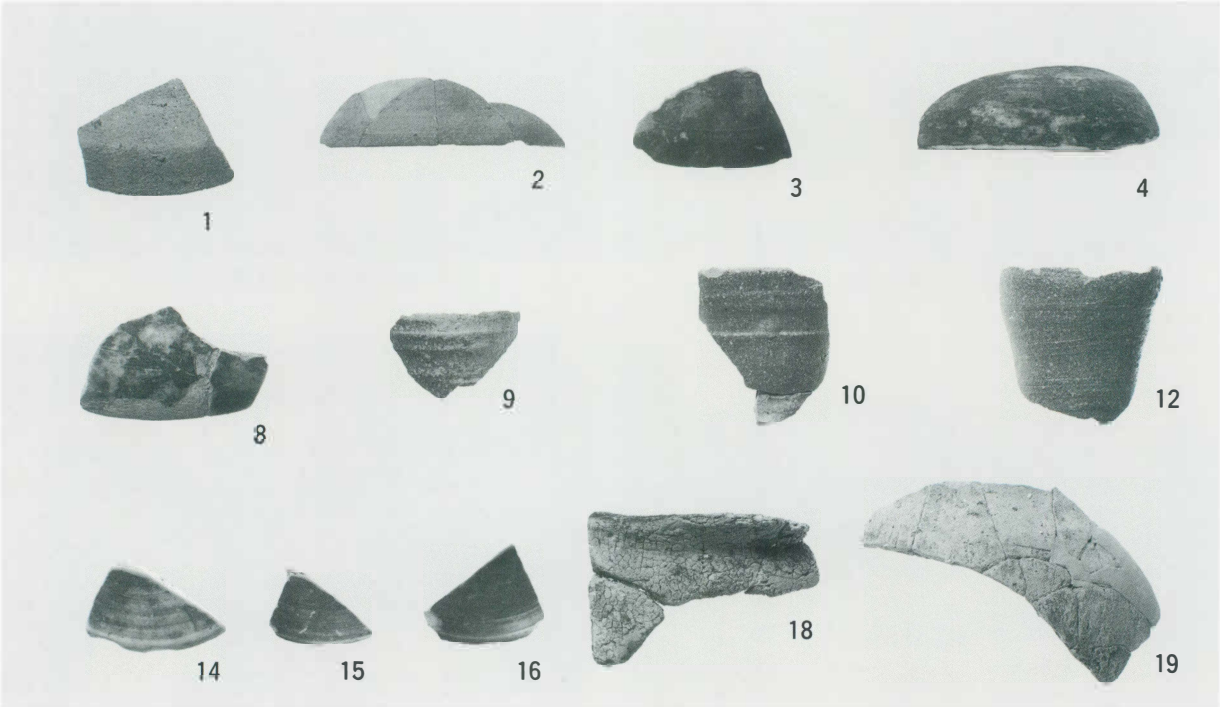
作業風景（南から）

図版10　７号古墳出土遺物







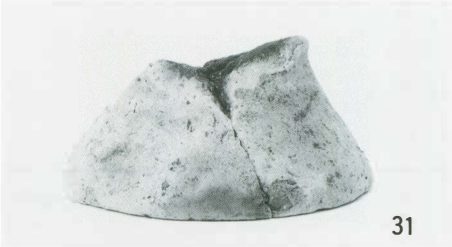


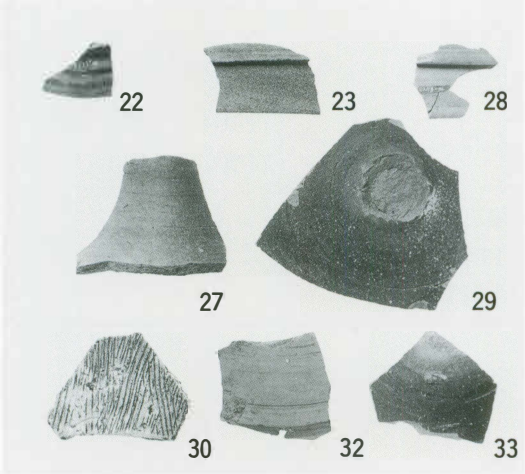
21

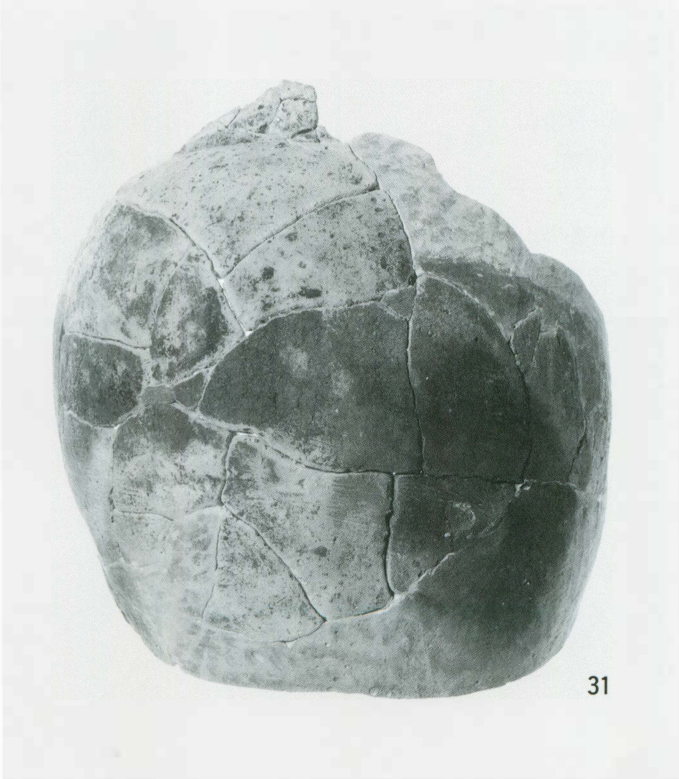
21

24

26


31


22
23
28
27
29
30
32
33


31

25

34

報告書抄録

ふりがな	ななたんだばんばやま７・10・11ごうこふん
書名	七反田番場山７・10・11号古墳
シリーズ名	岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書
シリーズ番号	第93集
編著者名	三浦徹大、小野木学、藤岡比呂志
編集機関	財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター
所在地	〒502－0003　岐阜市三田洞東１－26－１　TEL　058－237－8550
発行年月日	西暦2005年３月18日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
ななたんだばんばやま 七反田番場山 ７号古墳	ぎふけんぎふしかのやまもと 岐阜県岐阜市加野山本	21201	10126	35° 27′ 53″	136° 49′ 55″	20030512～ 20030818 800㎡	主要地方道岐阜美濃線番場山トンネル工事に伴う
ななたんだばんばやま 七反田番場山 10号古墳		21201	10129				
ななたんだばんばやま 七反田番場山 11号古墳		21201	10130				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
七反田番場山 ７号古墳	古墳	古墳時代	円墳 横穴式石室	須恵器 土師器 近世陶器	古墳時代中期～後期の古墳を３基検出した。
七反田番場山 10号古墳	古墳	古墳時代	墳形不明 横穴式石室	なし	
七反田番場山 11号古墳	古墳	古墳時代	円墳か 木棺直葬	須恵器 土師器 金属製品	

岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書　第93集

七反田番場山７・10・11号古墳

2005年３月18日

編集・発行　財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター
印　　刷　安藤印刷株式会社